

愛媛大学教育学部

第 111 号

# 同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番  
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp



愛媛大学教育学部同窓会役員一同

## 二つの出合い

同窓会会長

奥定 一孝

(昭三九卒)

教育学部同窓会員の皆様、新しい年が開かれるに当たって、今年こそは少しでも意味のある良き出合いの時をもちたいものと気持ちを新たにされたことと思います。

しかし、今日の政治的混迷、経済、雇用不安等々、時代の展望が見えない中で、個人個人の寄せる期待感もなかなか現実味を帯びてこないのが実状です。

この慢性的な閉塞感によるものか、長時間的娯楽番組が今年の正月のテレビを例年にも増してにぎわせていました。本来個人の「笑い」も、大仰な同調笑いに変質させられ、最近のうたにも、平板な「つながり」を求める歌詞が増えてきているように思います。これまで、「良き出合い」の価値としてきたもの、例えば「内面」とか「深さ」といったものを人々は嘲笑し始めたのでしょうか。

ところでこの年末年始にかけて、急激な軽みに傾斜するこれらの現象とは対照的な、教育学部同窓会に絡んだ二つの出合いがありました。

一つは、昨年十一月二三日に開かれ

窓会の活動の本来のあり方を示してくれた気がします。  
この講演会を介した親睦のなかから、是非岡山支部を発足させようという動きが芽生えたことも付記しておきます。

もう一つは、女子師範学校同窓会館「白楊会館」建設に端を発する「財団法人白楊会館」が、今年一月十日をもって解散する、その歴史的時間と、そこに関わった方たちとの出合いです。

この建物は、平成五年以来愛媛大学同窓会連合会の管理におかれていたが、平成一六年売却、現在は洋食館として再利用されています。その壁面にはこう書かれています。

「白楊会館の歴史は、昭和三(一九二八)年、愛媛女子師範学校卒業生たちの研究活動、親睦、団欒、宿泊などのための場「われらが家」を作ろうとしたことに始まる。建設資金は同窓生の寄付によってまかなわれ、昭和九年五月一日落成。……昭和一六年太平洋戦争勃発、同一八年三月、廃校となり、母校なき白楊会館は、以後も同窓生たちが建物を守り、終戦の日を迎えた。戦後には、海外から身一つで引き揚げてきた会員、家族の生活の場として使われ、和室や講堂を仕切って大家族の住まいとなった年月もある。昭和四一年九月、財団法人「白楊会館」設立。……昭和四二年からは結婚式場、教育相談、茶道や華道、手芸教室などの事業をおこなう場として利用され、その運営をすべて同窓生の力によっておこなわれた。しかし、高度経済成長とともに会館の利用者も減少、年月とともに忘れ去られ、今日に至った。……」

と。歴史に翻弄されてもお毅然とある建物の姿に、先輩たちの気概を感じさせられます。

財団法人白楊会館は、その後も結婚相談を唯一の事業にして運営されてきましたが、女子師範学校同窓の方たちが高

齢となるなか、白楊会館の精神と資産を愛媛大学で生かしたいと希求する声が高まり始めました。法人法の改定の時期が探られ始めたのです。残余財産の解散を愛媛大学にする道は予想外に険しいものでした。愛媛県との交渉が大学当局のご尽力で進められ、解散への道が開かれました。残余財産が愛媛大学校友会館の建設等に生かされるようになり、その一室に子女教育の精神を生かす場としての「白楊の間」が設けられました。更に白楊会館結婚相談所も新たな形で愛媛大学校友会の事業として引き継がれることになったのです。このように、望外とも思えるほどに実質的な解散に向かうことの出来た、その足跡には、理事長を永年務められた前同窓会長長兵頭寛先生のたゆまぬご尽力がありました。

一月八日に開かれた財団法人白楊会館の最後の役員会は、これまでの幾多の役員会や結婚相談事業、また解散への道のりにもつわる悲喜こもごもの思いとの出合いであり、また、かつて白楊会館に関わり、相見えることのできなかつた諸先輩たちとの歴史的な出合いでもありました。

愛媛大学文化講演会の集まりでの、それぞれは今を見出そうとする人たちとの出合い、また白楊会館解散を契機にした、その歴史に関わる出来事との出合いは、今日の情報時代のもたらす、多くの簡易的で表層的な出合いとの差異を感じさせるものでもありました。

この年末から年始にかけての二つの出合いは、いずれも教育学部同窓会を介して生じたものであり、私にとって意味深いものであったように思われます。  
どうか今年こそは、同窓会員の皆様にとって、健やかで「よき出合い」のある一年でありますよう願ってやみません。

## 目次

### 表紙

写真 阿部 修一  
題字 元愛媛大学教育学部教授 菊川 國夫

「二つの出合い」……………(1)

心響……………(2)

「支えられそして支えに」山本千鶴子……………(3)

「研究室訪問」平松義樹先生今日は……………(3)

「世界に開かれた大学を目指して」……………(3)

「あたたかい国、フィリピン」……………(3)

魅力的な大人のマナー講座(四)……………(7)

「魅力的な大人のマナー講座」……………(7)

「教育学部サポーター制度」より……………(12)

「職務たより」……………(13)

「私の活用力」……………(13)

「東温・南吉井小教諭 野中 真悠」……………(13)

「経験と学びの日々」……………(13)

「愛南・篠山小教諭 山本 直也」……………(13)

「熱さ心」……………(13)

「西条・西条南中教諭 神野 誠」……………(13)

「NPOが社会を変える」……………(13)

「今治NPO役員 吉武 優子」……………(14)

表紙写真について……………(14)

学内最近のニュース……………(17)

第一回愛媛大学ホームカミングデー……………(17)

が開催されました……………(17)

教育学部留学生歓迎会を開催……………(17)

第一回三輪田米山展開催中！……………(17)

文芸……………(19)

川柳……………(19)

絵手紙「絵手紙の世界で」……………(19)

俳句「俳句とわたし」……………(19)

短歌「教師遍歴」……………(19)

水墨画「ふる里を思う」……………(19)

栗田 忠士……………(19)

井上 弘子……………(19)

白石 美子……………(19)

吉田 修……………(19)

小池 郁子……………(19)

支えられ、  
そして支えに



理事  
山本千鶴子  
(昭五五卒)

「お久しぶりです。集まれるメンバーだけでもお会いしたいのですが……。」七月下旬、うだるような暑さの中で、教え子からの電話を受けた。懐かしさと驚きとうれしさに胸が高鳴った。松山市立清水小学校での出会いから三十年がたった。「五年三組魔法組」、これは、初めて担任したときの学級の愛称であり、合い言葉でもあった。「五年三組魔法組」は、次の年「六年三組魔法組」にバージョンアップした。「何かあっても助け合っ魔法がかかったように乗り越える」そんな思いが詰まった愛称であった。その当時の清水小学校は、全校児童一六〇九人。一学年は七学級もあった。子どもたちへの私の指導は、稚拙で、ただただ一生懸命に子どもたちにかかわっていた。一生懸命なんて当たり前。振り返れば、子どもたちには迷惑なことも多かったと思う。本当に。泣いたり笑ったり怒ったりと楽しい日々だった。そのときの教え子の一人が家に遊びに来たときのこと。「もう、帰らん。ここの家の子どもになる。」と言い始めた。私は「それは無理なんよ。」と説得力のないことを言っその子を帰らせた。その子は父親に育てられていたが、その父親も不在がちであった。中途半端な愛情を注いだと反省し、ずっと小骨が刺さった感じを持ち続けていたが、その子が高校入学のときに手紙をくれた。「いろいろあったけれど、勉強することが自分を助けると思っています。頑張ります。いつも気にしていってくれたから手紙を書きました。」とあり、涙が落ちた。十月末、その子どもたち（現在四十歳過ぎ）とのクラス会が実現し、改めてその当時、私は子どもたちのことが見えてなかったなと反省しつつも、楽しいひとときを過ごした。最初の教え子たちとの思い出は、宝物で色あせることはない。その後、多くの子どもたちと出会った。どの子ども・学級とも忘れられない楽しく充実した思い出がある。もちろん、



苦くまだ葛藤を含んだ思い出もある。でも教師になって本当に良かった。次代を担う人間を育てる魅力のある職業だと思っ。振り返ると、教師になるまでに、多くの先生のお世話になった。教師になりたいと思ったのは、中一だった。担任だった土居貴美先生のような先生になりました。大学時代にもたくさん先生の御指導を受けたが、特に教育心理学の中村和夫先生や渡邊弘純先生には多くの教えを受けた。教師になってからは、上司や先輩の先生方に毎日、様々なことを学んでい

た。勤めてまもなくのころ、同じ学年部の先生方は、研究授業の前に授業を何回か見せてくださり、細かい点まで教えてくださった。子どもへの指導については、悩みも多かったが、いつも同期や年の近い友人が悩みを聴いてくれたり励ましてくれたりした。また、優しい言葉をかけてくださったり、具体的に指導してくださったりした上司の存在もある。なんとありがたいことなのかと感謝の念でいっぱいになる。理想と現実のギャップは、当然大なり小なりある。今、授業や子どもへの指導、保護者への対応などで悩まれている先生は、どうぞ身近な同僚の先生に本音で相談してみてください。抱え込まず自分の思いを素直に語れる場があれば、心は折れにくいと思う。

最近、経済的な理由で勉強を断念する人がいると聞く。私の場合、七歳のときに父が亡くなり、当時、経済的に苦しく、高校も大学も奨学金を受けた。高校を卒業したら働くべきとも思ったが、母と姉のおかげで教師を目指して愛媛大学に進学できた。経済的な事情で、もし退学を考えている学生がいたら、どうか夢をあきらめないでと強く思う。たとえ一時あきらめても再チャレンジをしてほしいと思う。また、就職についても厳しい現状を見聞きする。学生時代に自分と向き合い、好きなことや自分の可能性を見つけ、何をしっかりしていけばよいか、より具体的に考えたらよいと思う。勉強や努力は必要であるが、好きなことや自分で決めたことなら、頑張り続けることができるのではないだろうか。そして、人のつながりを大事にしてほしい。学生たちとも出会う附属に今は勤めているが、全般的にまじめで素直でおとなしい印象を受ける。その姿にさわやかさを感じることも多いが、そのよさを



791-0122  
松山市末町  
甲一六四番地

- 先輩を偲ぶ……………(22)
- 故「森岡 数榮」先生(十二)最終回  
林傳次先生遺稿集 上甲 修
- 「把翠」を緬く(二)……………(23)(22)
- 今、教育に思うこと……………(24)
- 「開かれた大学に感動と感謝」  
「明治・大正の頃の教育事情」(二) 小野植元幸 上甲
- 叙勲・受賞……………(25)
- 第十二回愛媛大学教育学部懇親会
- 【報告】……………(27)
- 同期会……………(27)
- 「昭和三十三年卒業生同期会」 村上 嘉一
- 「第二十五回愛師二十二年同期会」 篠田 和男
- 「人・結びの心」 重見 法樹
- 「走って走って三十年」 昭王会関東の集いから 伊藤
- 学部トピックス……………(30)
- 「愛南町立家串小学校『ふれあい コンサート』」に出演
- 「上海万博『共同の万博・共同の歓楽』」に教育学部生三名参加
- アラスカ日記……………(31)
- NPO法人和田重治郎顕彰会 土居貴美会長に聞く 仁木 省三
- 寄贈図書……………(33)
- 「たのしさいっしょにみつつけよう」 愛大教育附属幼稚園
- 「この子らと自由の空へ」脇坂千鶴子 同窓会への寄付者 会報送料送金者名……………(34)
- 敬 申……………(34)
- 原稿募集……………(29)
- 放送大学入学生募集……………(29)
- 会報発送と送料納付について……………(29)
- 愛媛大学文化講演会が開催されました……………(35)



# 研究室的訪問

教育実践総合センター

## 平松義樹先生今日は

今年の夏はまさしく異常気象だったが、朝夕に秋の風情を感じさせる九月下旬、平松義樹先生の研究室を訪ねた。

先生は、文部科学省や愛媛県教育委員会、松山市教育委員会等の各種委員会委員長をされており、最近では、子育て支援や性教育、ケイタイ問題等で県内はもとより県外にも出かけ、各種研修会の講師やシンポジウムのシンポジストをされ、本場にマルチな活躍をされておられる先生です。先生は、まさしく『歩く総合教育センター』そのものです。

また、大学内部では「教員の免許状更新講習のための委員会」の



## 委員や教育実践総合センター長も

されており、拝見した資料では、昨年度、ざっと数えて二百件近いお仕事をされています。特に、心に響いたことが二つあります。

一つは、松山市内の不登校生を持つ保護者の会で講演されたのがきっかけで、あるお母さんから悩み相談のメールが入るようになってきたそうです。毎日、不登校生のわが子が家庭にいることの悩みとか、子どもの将来への展望が開けない等の切実なメールだそうです。先生はその学校の校長先生や担任の先生、養護教諭の先生方にお願いで、その不登校生が学校に行くことができるようにサポート支援をされ、お母さんへのケアもうまくいき、その子は保健室登校ができたそうです。

もう一つは、看護学校の学生の話です。「がんを告知された二十歳の学生さんが、私に心をひらいて下さり、メールをくれるようになりました。早朝や深夜などにメールが入ってきます。今朝も『先生、吐き気があり、今は苦しい』とメー

ルしてきました。その生徒から『先生、命って何ですか。生きるって何ですか。私は何のために生まれてきたのですか』という重い問いが、毎日のように入ってきます。私は、ただただ無力感を覚えつつも、彼女の心に寄り添い、丁寧に返事は送るようにしています」と。超ご多用の先生が、このような事例に個別に、丁寧に対応されているのを伺って、とても心動かされました。

## 先生は、兵庫教育大学大学院の

一期生で、同大学院の同窓会では、今年度から修了生の中から、顕著な社会的活動をしている人を表彰する制度ができたそうです。先日、栄えある第一回目の授賞式があり、そこで表彰されたそうです。

これまでのご活躍ぶりを拝聴していると、先生が表彰されたことは当然のように思いました。また、先生は愛媛県教育研究協議会の教育論文審査委員長を長年務められています。そのことに関して、こんなお話をしていたきました。

「学校現場の先生方が苦勞して書かれた実践論文を学生に紹介しているんですよ。教育現場の最前線でいろいろと苦勞されている先生方の実践を大学の講義で紹介させていただくとともに、大学の最先端の研究成果を学校現場の先生方に紹介させていただくように心がけています。本当に『つなぎ役』ですね。」

大学では、学生に教師の大変さと教職のロマンを語っています。「私は小学校教師を十年間、中学校教師を十年間経験させていただいたおかげで、さまざまな子ども

も達と出会いました。例えば、中学校教員時代に、家出した少女を探しに、松山市内の川まで夜中に行つたことがあります。当時、中の川は暴走族の走路と化し、それを煽るギャラリーもいっぱいありました。そういう中に飛び込んで、女生徒を見つけ出した修羅場の体験を学生に話すこともありまして。学生さんは真剣に私の話に耳を傾けてくれます。

そういう暗い、辛い、切ない体験ばかりでなく、子ども達とかかわることによって生きるエネルギーをもらってきたということも語ります。教師という仕事は子ども達を教えながら、自分が生きる勇気を彼らからももらっている素敵な職業なんだということも……。

私は四十一歳で、愛媛県下最大のマンモス校南第二中学校で研修主任をさせていただきました。授業時間も教科だけで二十時間、さらに野球部も担当していました。が、あのときが一番充実していましたね。そのときに、研修主任として左のような研修通信『O発進』を毎日出していました。土日以外毎日二年間続け、最終号は四百五十号でした。

ここには校長先生の朝会での講話や研修部会の様子、先生方と共有化しておきたい情報を載せました。



『O発進』を書くためには、各方面に感度のよいアンテナを張っておく必要があります。継続して発行したことよりも、そのアンテナでみてきたものの見方が私にとっては大切な財産でした。先生方が放課後、教材研究で遅くまで頑張つていたり、休んだ生徒の家庭訪問したりして、お互いが切磋琢磨する学び合の風土ができあがっていったと思います。

研修主任をしつつ野球部の担当もしていました。第八回四国軟式野球大会で優勝したことはすこい思い出に残っています。よく中学校では部活動や生徒指導で忙しいから研修なんてできないというマインナス発言が聞かれますが、私はそうは思いません。やり方次第で、工夫次第で両立していけると信じています。

この『O発進』を発行するために、常日頃から情報収集には力を注ぎました。たとえば、このボックスのように予めジャンル分けしておき、関係ある資料を入れておくように心がけていました。日常的にさまざまなアンテナを張って資料を収集し、整理しておくことと研修通信を発行することは、そんなに苦痛ではなくなるんです。年間を見通して、いつ、どんな資料が

必要か、予め見当をつけておいてそれに関する資料収集しておきましたから、放課後さつと野球部の練習に行けたのです。」

話の途中で学力問題授業実践におけるプレゼンテーションを見せていただいたが、理論構築が実的確で分かりやすく説得力を持っていた。以下は平松先生のお話です。

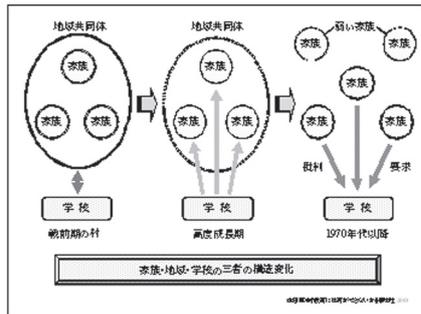
「初めて学年主任になったときのことでも思い出深いです。いきなり三年生の学年主任を校長先生から仰せつかりました。その学年は生徒指導上大変な学年でした。教師と子どもや保護者間に相当なギャップがあり、いろいろな問題事件や保護者会が何度も開かれた学年でした。学年主任以下、十五名いた先生の内十三名が翌年には転出されました。いきなりの三年の学年主任は相当プレッシャーでした。しかも、そんな荒れた学年でしたから……。」

私は、このときにも学年通信「0発進」を毎日発行しました。子ども達や保護者の知らない先生方の努力する姿や三百五十名の子ども達の努力する姿を伝えたのです。子どもや保護者は、放課後、遅くまで残っている先生方の仕事を知らずして。知らないことからいろいろな誤解が生じているのではないかと思ひ、毎日、それぞれの先生方のすばらしさを綴り続けました。最初は、訝しがっていた保護者も六月ぐらいから変容してきました。『安心して子どもを預けられる』という雰囲気が出てきたら

でしょうね。

この学年を預かって感じたことは、困難な問題に直面しても逃げずには問題の解決にならないということでした。先生方は、本当に献身的に自分の預かった子ども達と真摯に向き合ってくれました。その姿に子どもが感動し、その子ども達の変容に保護者が安心されたのでしよう。私は「0発進」でその変容を綴っただけでしたが、その学年は見事に変容していったと思えます。やはり、教師が一枚岩になつて子どもと真摯に誠実に対応することが大切ですね。

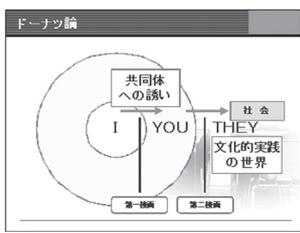
今の時代、ある意味で教育が困難な時代になりつつあると思えます。携帯問題と性的問題も、その一例でしょうか。左の図は東京大



学の広田教授が表した図です。戦後の社会構造上の変化を示したのですが、豊かさを手に入れた日本は、その代償として大切な何かを失ったのかも知れません。特に、一九七〇年代以降は、金銭感覚を麻痺させる消費社会への移行、規範意識の欠如を招いた情報化社会、人との関係性を希薄化させた

都市化社会、これらの変容が子どもを育てる環境にある意味では悪化させたとも考えられます。子育ての一つの理論ですが、佐伯胖さんが提唱するドーナツ理論というものがあります。私たち教師や保護者は「YOU」の立場です。未熟な子どもである「I」を、私たちの社会「THEY」で生きていけるように誘っているという理論です。教師や保護者が子どもに言ったりやったりしていることが「第一接面」です。この「第一接面」に影響を与えるのが「第二接面」です。教師や保護者が生きていく価値としてどのようなところに重きを置いていくかによって、「第一接面」の言動が変わってきます。

これまでの社会では、教師や保護者が社会で生きていくことの意味を語ったり、どう生きればいいのかを行動で示したりする「第一接面」が保証された時代でした。ところが、現代社会は、「第一接面」の教育の場が危なくなりつつある時代です。子どもは親が知らない、教師が知らない世界にダイレクトで繋がっているのです。例えば、携帯電話を通して性の世界に飛び込む子どももいます。自分の部屋にいな



の世界とつながっているのです。「0発進」は、教師と保護者をつなぐ役割を果たしていると思えます。教師が思っていることを保

護者に語り、保護者はそれに反応し行動する。このつながりによって、子ども達は安心感を抱き、変容することができたのではないのでしょうか。

私が、研修主任や学年主任の時に若い先生方にいつも話していたことは、次の三点です。

- 一 「子どものそばにすべてがある。」
- 二 「子どものためにこの学校があり、子どものために私があ

る。」

決してこの逆ではない。教師が「私」を先行させることは、教育の入り口にも到達できない。子どものおかげで、自分は教師でいることができるという自覚を持たなければならぬ。

「かきくけこ」の精神をもつこと。この「かきくけこ」の精神で、日々、子どもと交わることができる教師を目指しました。

「か」…「感謝」の心で、「書き」とめて
「き」…「機会」を逃さず、「聴き」上手。
「く」…「愚見」を述べると、「具体」化し、
「け」…「謙虚」な心で、「迎合」もせず
「こ」…「厚志」の心で、「行動」す。

今時の若い学生について 現代の学生は、大変やる気旺盛です。しかも優秀です。彼らの学んでいる姿は心打たれるものがあります。ぜひ教師になつて欲しい。そう思つても、愛媛の教員採用は狭き門です。本当にこの学生はい

い教師になれる素質があると思つても、実際に実現することが難しく、悩んでいる学生さんを見るのは忍びないですね。夢を「あきらめるな」ですね。

卒業生への呼びかけ

大学の行事等を通じて、先輩との繋がりをを感じる体験を多くするといいと思います。この同窓会で社会に出て多大な貢献をしている方をサポートするようなシステムを作られてはどうでしょうか。兵庫教育大学同窓会で表彰されましたから、積極的に母校にかかわっていただきたいと思います。

今後の研究では

今、一番研究してみたいことは、授業中の教師と子どもが交わす「会話分析」ですね。単なる授業記録ではなく、授業中どのような文脈の中で、どのような発言があったのか、そしてそこから起る出来事を分析したいと思つてます。かつてフランダースのカテゴリ分析が盛んでしたが、それとは異なり、授業という状況に

## 世界に開かれた大学を目指して

愛媛大学は、「地域にあって輝く大学」として、教育面では学生中心の大学づくりを、研究面では地域・環境・生命を主題とする研究の重点的推進と世界レベルの研究拠点形成を、社会貢献面では優れた人材の輩出と学術研究成果の還元による持続可能な発展と世界平和への貢献を目指しています。

グローバル化が急速に進展し、高等教育の国際化が加速する状況の中で、愛媛大学はカリキュラムの改善、厳正な成績評価の導入、ならびに英語による授業の導入などにより世界に通用する教育の高度化に取り組む必要があります。また、地域の人々と一緒に国際交流に積極的に取り組むことや、アジアにおける国際連携と国際的な教育研究の拠点としての役割を果たすこともますます重要な課題になっています。愛媛大学は、国際連携を教育、研究、社会貢献と並ぶ第4の柱と位置付け、以下の取り組みを推進します。

## 国際貢献・学術交流

愛媛大学の第四の柱である「国際連携」を推進するため、先進諸国の研究拠点と連携し、国際的な研究を先導すると共に、とりわけ援助の手を求めている東南アジア・南アジア、アフリカを中心とする途上国へ教育研究を通じた支援を展開するなど、国際貢献を積極的に行っています。

## 愛媛大生・教師の卵フィリピンで実習

### 外国人留学生への支援

全留学生に対して、入学から帰国後までの様々な支援を行っています。



### 海外留学・海外派遣

「国際的視野を有する人材の育成」を目標に掲げ、学生の海外派遣、海外留学にも力を入れています。



### キャンパスにおける国際交流

留学生の受け入れを積極的に行い、留学生との交流の場を多く設けるなど、キャンパスの国際化を目指しています。



### 地域における国際交流活動

留学生と日本人とが共に学び、行動し、そして語りあえる場の提供を心掛けています。



### アジア人財資金構想：高度実践留學生育成事業

—四国発グローバル人材創出を目指した留学生支援プログラム—  
日本とアジアの架け橋となる優秀な人材の受入・交流を拡大し、アジア規模での人材育成、大学企業のグローバル化に貢献します。



### 国際連携推進機構

愛媛大学の国際戦略構想を具現化するため総合的な国際交流管理機能を持つ国際連携推進機構（全学組織）には、国際戦略検討と企画ならびに国際拠点形成を担当する「国際連携企画室」、留学生や日本人学生の教育支援を担当する「国際教育支援センター」、アジア・アフリカESD支援や拠点国への活動展開を担当する「アジア・アフリカ交流センター」の3つの組織が設置され、教育と研究の両面において本格的に国際交流・国際連携を推進しています。

# あたたかい国、 フィリピン

教育学部4年生

谷村 晴香



フィリピンは私の行く初めての海外の国だった。異文化や英語に興味のある私にとって、大学の授業で外国に行くことのできる機会に巡り合うことができたことはとても嬉しく、行く前からとても楽しみに待たまらなかつた。不安と期待がよぎる中、現地に行ってみると、まず、日本はとても寒いのにフィリピンは暖かいという気候の違いに驚いた。年中暖かいフィリピンは少しうらやましい。現地では様々な観光地に行き、フィリピンの文化に触れた。初めて見る食べ物もあった。一番驚いたのは「バロット」という食べ物である。ゆで卵の中が羽化直前の雛の状態な

のだ。見た目が強烈でどうなるかと思っただけで、思い切った挑戦した。意外にも味は口に合ったことのある味で抵抗はなく大丈夫だったけれど、かわいそうになって全部食べることができなかった。日本人のうなぎにあたるのがフィリピン人というバロットらしく、おいしそうに食べているフィリピン人はすごいなと思ってしまう。食べ物以外にも、ジプニーという乗り合いバスであったり、ココナツの木が生い茂る大自然であったり、伝統芸能を見たりとたくさんの文化に触れることができた。

たくさんさんの文化に触れていく中、授業をさせていた学校ではないフィリピンの学校訪問もすることができ、たくさんの子どもたちと会った。全ての学校の様子を見て一番驚いたことは、授業の始めと終わりの時間など日本に比べるとあまり厳しくないことだ。日本は授業の始めと終わりにはチャイムがなり始まるまでには席についておくのが普通で、きちんと座っていないと先生に注意されたりする。また、たとえ休み時間でもお菓子を食べるなんてことはあり得ないのが学校だと思っていた。しかし、フィリピンの学校は規則があまり厳しくなく、全てが子どもたちに任されているように感じた。何より、子どもたちのキラキラした笑顔にとっても心打たれた。例え言葉が通じなくても、笑顔は世界共通で心が通じ合える



と強く感じた。フィリピンにいる間ずっと感じていたことだが、フィリピン人はとても温かく、子どもに限らず、大人も笑顔が素敵だった。

さて、この大学の授業の一番の目的は、フィリピンの小学校で英語で授業をすることである。一年目は小学校三年生対象に理科で昆虫の授業を、また、二年目は小学校三年生を対象に社会科で公民館に関する授業をした。日本語でさえも難しい授業を英語ですることは、とても興味深いことではあるが、とても難しいものだった。想像力を働かせ、とっさに話したくなるだろう言葉まで英語で言えるように準備しておいた。英語はあくまでメインではなく伝えるツールでしかない。授業は一回きりである。子どもたちに楽しんでもらえるように、また学びを深められるように、教材研究にもとても力を入れた。特に、二年目は公民館

を扱い授業をすることに決めたのだが、あまり公民館についての知識もないし、あまり利用したこともない私たちに授業が出来るのか不安であった。教師自身が何も知らないようでは何も子どもたちに伝えることができない。そこで、私たちは公民館について理解を深めるべく、色々な書籍を読んだり、実際に公民館に行ったり、一緒に活動をさせてもらったりした。また、フィリピンではどの様な地域社会になっているのか調べたり、聞いたりすることで理解を深めた。実際に公民館に行ってみると、自分たちの目で確かめたり、色々なことを体験したりすることを生かすことで授業の内容に深みが出てきたように思う。しかし、それをどのように小学校三年生に伝えていくか悩んだ。公民館のないういりピンで、子どもたちに理解してもらえるか考え続けた。写真やビデオなど具体物を効果的に使用し、理解してもらえようようにスマートフォンやタブレットとして、クイズを用いたり、体験活動を入れたりした。予想以上に子どもたちの反応はよく、積極的に挙手をしてくれたり、グループでの話し合いも真剣に取り組んでくれたり。一生懸命準備した甲斐があり、授業後は達成感に満ち溢れていた。

現在日本では、国際理解が叫ばれる一方で伝統や文化を尊重するように言われる。一見、逆のことを言っているようなのだが、自国の伝統や文化を知ってこそ、こ

ミュニケーション意欲も湧いてくると共に国際理解が深まると私は二度のフィリピン滞在を経験して感じた。二回生の時、フィリピンの方と話す中で日本のことを聞かれることが多々あった。おりがみを日本の文化として紹介することができたのだが、あまりにも自分が日本のことを知らないことを痛感した。この悔しさを胸に、三回生の時には三味線を子どもたちや先生方に紹介できる機会をいただいた。異文化を知るためにはまず自国のことを知っていないとどんなところが違うのか理解できないと感じたし、自国の伝統や文化を理解し、それを発信しあうことで真の国際理解が生まれるのではないかと感じた。日本人として日本の伝統文化を守りつつ、国際社会の一員として、これからさらに他の国にも目を向けていきたい。



「愛媛大学教育学部サポーター制度」より

## 魅力的な大人のマナー講座 (第四回)

株ダロウスリッシュ社社長

浜田純子氏講座より



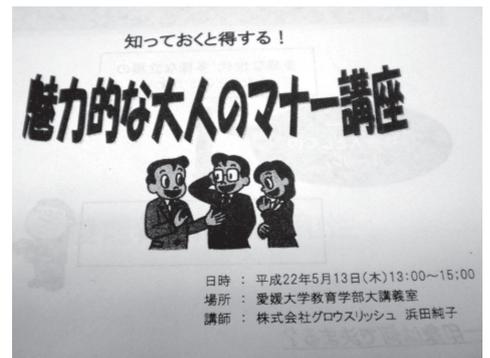
皆さん今日は、浜田純子と申します。こちらの大学に伺ったのは二十数年ぶりです。懐かしさを感じ深いものがあります。そして後輩の皆様とお会いでき、二時間ばかり皆様と一緒に過ごさせていただくことを光栄に思っています。

本日、私は「魅力的な大人のマナー講座」というタイトルを頂いております。私のこれまでの経験から、皆様を知っておくと得るかなと思われのことをクイズ形式を取り入れながら楽しく、そして、どうせ実施するのだっつらしかりとした、充実した二時間にしたかと思っております。

私は卒業後、日本航空に入社いたしました。その間に結婚いたしました。三十歳になったとき退職いたしました。暫く専業主婦をしていましたが、私の性格ですか、近いうちに社会復帰したいとの気持ちを持ちながら専業主婦としておりましたが、私の次女が小学校三年生になった時、私に機が熟したと思えました。

そこから就職に向けて準備を始めました。ブランクがありましたので、就職すると言ってもなかなか厳しい、どうしたらいいのだろうと思ひ、国家資格を取りました。その資格は社会保険労務士という資格ですが、皆様ご存じでしょうか。

社会保険労務士の実務の勉強をし、数年後独立しました。その後、この資格での仕事を始めた頃には、JAL時代のキャリアを生かして、ビジネスマナーの講師が出来ることに気がつきました。そこで、インストラクションとかグルメニテーションとかについての勉強をし、実際に研修を行って来て、現在に至っております。本日は、マナー講座として、五



つ大きな柱を考えております。一、マナーの重要性について、マナーは何故大切なのかを。二、第一印象は何で決まるか・メラビアノ法則・身だしなみの三原則・姿勢はやる気のパロメーター。三、コミュニケーション能力を高める！・コミュニケーションとは、・よりよいコミュニケーションをするために・言葉の使い方。四、クイズで学ぼう！知っておきたいマナーあれこれ。五、マナーは心遣い。以上五つの柱立ててしてお話しいたします。まず、マナーとは何かを押さえることは大切ですが、それを第一印象の重要性、それから挨拶、姿勢がどれだけ大切かということをお伝えいたします。二つめに、コミュニケーションの言葉の使い方についての工夫についてお話しします。三つ目は常識として知っておくと便利なだ

と思うマナーのことを質問形式で進めていきます。この三つを中心にこれから進めていきます。

「マナー」と言うことについて辞典を引くと、「やり方、方法、習慣」という言葉が出て参ります。このように社会人としてのルールですね。何故ルールが必要なのでしょう。その「マナー」がなければ、円滑な社会のコミュニケーションで信頼関係がなくなるそうですね。マナーがないと信頼関係が築けません。この信頼関係がなければ社会人としての仕事が出来ません。人と人との信頼関係なくして仕事は成り立ちません。

ここでもう一つ大切なことは、社会に出るといろいろ成人した世代の方がいます。いろいろな立場の方もいます。後輩もいれば、先輩、同輩もいます。上司、社長、顧客といろいろな方、それに加えて、いろいろな価値観の違う方がいらつしやいます。このような社会の中で、誰とでも関わっていかなければいけないのです。学生の内は苦手な方とつきあわなくても特に問題がないのですが、社会に出るとそのような方ともかかわっていかねばならない。この人は好きだからつきあい、この人は嫌いだからつきあわないなどの甘えは通じません。だからマナーが必要なのです。

「人の印象は何によって決まる

かどうか」ということで「メラビアンの法則」というものがあります。

このように目からはいる情報「表情、姿勢、態度」(五十五%)は、その人の気持ちがあらわれています。例えば、何かをして「ああいいですよ。OKですよ。」といっても、何時も内心嫌だなと思つていると、どこかにそれが現れているものです。だから、見た目だけに良い印象を与えるかについて、自分がいかに配慮することが大切です。

それともう一つ、この見た目とその耳から入る声の音色(三十八%)からの印象を加えると九十三%になる。この九十三%の印象がよければ、その後の話す内容にも好印象をあたえることになりやす。これが、人間関係の不思議なところだ。

逆に印象が良くなければ、素晴らしいことを話しても実際よりもずっと損をすることになります。だから、第一印象が大切になります。そこには、「身だしなみ三原則」は、清潔感、機能性、調和性です。この中で一番気をつけなければいけないことは、清潔感です。この清潔感に関しては、周りの人には注意しづらいのです。気がついて、不快だなと思つてもなかなか言えないのです。この清潔感は大切にしてほしいし、常日頃から意識してていただきたいものです。

次に機能性、調和性についてですが、例えば、学校の先生が運動会の時、スーツを着てハイヒールを履いて運動会に臨むことはできませんね。その意味です。

調和については、二つあります。まず一つは、自分の頭の先から爪先までの調和、例えば、社会人になってスーツを着たときです。スーツを着ているのに靴だけスニーカーを履いていたのではこれは合いませんね。これが一つの調和です。もう一つは、その周りの環境、職場でもいいのですが、その周りの環境に調和しているかどうかです。これが大切ですが、いかにその雰囲気と調和させるかそれが大切です。周りとの調和と気をつけなければならぬ一つとして、目立ちすぎないことが大切です。お洒落はプライベートの時はかまいませんが、時、場所、意味、いわゆるTPOを考えて身だしなみを整えなければいけません。それから、どの程度にするか分からないときには、四十歳位の方が自分の格好を見てどう思うかどうかを目安にして考えてください。

第一印象で大切な二つめとして挨拶についてお話しします。

たいいていの人は、挨拶をしていらずしやるのですが、たかが挨拶、されど挨拶です。挨拶は自分が勝手にすればいいと言うわけではなく、相手に届かなければ挨拶をしたことにはならないのです。

挨拶のポイントには三つあります。まず、「自分から」。相手から先にされるより、自分から積極的に行うこと。「明るく」これも皆様ご存じだと思います。「相手の目を見て」きちんと挨拶をする「そうすることで、以心伝心で、私は貴方に挨拶をしたのです。貴方に「おはよう」と声を掛けたのです。私は貴方に「ありがとう」ございました」と声を掛けたのです。というように、相手にしっかりと伝わっていきます。で、最後「おじき」が必要です。今から、正式に挨拶について、皆様にしていただきますので、恐れ入りますがお立ちになっていただきませんか。おじきをしてください。挨拶をする前にまず姿勢が大切です。男性は足を開いて結構です。手は横にすーっと置いて下さい。ただ背筋は伸ばしてください。女性は踵をつけます。爪先は多少開いても結構です。そして、背筋を伸ばし、手は挨拶ですから手は前にです、前に軽く置きます。正しい挨拶ですが、天井から何か引つ張られている感じがするぐらいにスーツと背筋をのばしてください。はい！綺麗ですね。では挨拶に行きます。まず、おじきにはリズムがあります。まず、1、2、3、4のタイミンクがあります。まず、1でパタッと倒します。まず、三十度位で結構です。一寸倒してみてください。おじき

をするときは先ず頭を下げないように。首に鉄板が何か入っているように、背中と首が真っ直ぐに繋がっているように感じ、全体を腰から全体を曲げてください。では、1で曲げましょう。はい2で止めます。3、4で元に戻します。はい1で曲げました。もう一度トライしましょう。はい、1234。では、「おはようございます」と声を出して1234。「おはようございます」はい！では、1でパタッと倒して、2でピタッと止めて34でゆっくり戻してください。ではもう一度「おはようございます」はい！いいですね。できるだけ歯切れのいい挨拶をした姿勢になって下さい。はい、とても綺麗な挨拶の姿になりました。

次に、相手に通じる挨拶をするのには、どうすればいいのですか。そうですね、「相手の目を見る」です。では、自分はこの人に挨拶をするというのを決めていただいて、その方向に向かって「おはようございます」といってみてください。はい、姿勢を正しくしてください。はい、「おはようございます」

どうですか、挨拶をされると気持ちがいいですね。では、次ぎに「姿勢」はやる気のバロメーターがあります。立っているとき。座っているとき。歩いているとき。この時の姿勢が実にその人

のもっている気持ちとかやる気とかでているものです。自然に現れてくるものです。また、「これはタブー」ということも書いていますが、立ち方については先程致しました。ここぞと言った時面接の時でも、職場、実習の時でもですが、いけないのは、「片足重心」これはタブーです。それから手を後ろに組むとか、前で、腕組みをするとかはタブーです。では座ったときには、これは足を組むことです。それから女性は膝が開いてしまふ。膝を開くことは大変ですが、閉じて膝が開くのはマナー違反です。歩くとき、踵を踏んで歩くとか、足を揃って歩くとかもそうです。

ところで皆さん、就職試験の面接で、面接官がその受験される方の人柄を知るために何を見るかとおもわれますか。座って面接をするとき、その人柄を知るために何を見るかといえますと、「表情」といわれます。人に会ったとき人柄を見たいとき何を見ますか。抽象的すぎたかもしれませんが、先ず最初の一つは「視線」です。二つめは「表情」です。三つ目は「話し方」最後は「姿勢」です。たかが姿勢ですが、この姿勢がいかに大切かと言うことです。

ここまで、第一印象をよくするためのポイントを四つ挙げましたが、身だしなみと挨拶とお辞儀と姿勢をあげました。

次にコミュニケーションに入っていきます。皆さん「コミュニケーション」とは何だと思いますか。「相手との意思疎通を図る行為」そうですね。このようにいいますが、でも、案外私たちはコミュニケーションという、うまく話すことにターゲットを置いていませんか。そうではなくて、「ある程度意思の疎通ができるかどうか」これがコミュニケーション能力があるかどうかということになりますね。

つまり、話すだけでなく、上手に聞けるかどうか大切になってきますね。では、ここでゲームをしたいと思えます。近くの方三人か二人一組になれますか。そのグループの中で、話し手一人を決めて下さい。残りの方は聞き役です。話し手は聞き手に向かって下さい。三人の場合、話し手に向かって、こちらが横顔がみられるようにしてください。話し手の方は手を挙げて下さい。聞き手の方は話し手の横顔しか見えません。正面を向かないで下さい。では、話し手の方は二分間話してもらいます。「楽しかったことや自分の夢」とか、好きなことを話して下さい。聞き手の方は絶対に返事、相槌等何もしないでください。もし、どうしても笑いたくなると目を閉じて石のようにしてみてください。では、二分間話してみてください。準備はよい

ですか。始め！。いかがですか。感想を聞かせていただきます。

「しゃべりだけでは難しい」「凄く無視された状態でちよつとむかつきました。」「寂しかった。」「話しづらかった。」「つらくなつてきました。」「では、聞き手の方はどうでしたか。」「面白くないのに笑いまくれた。」「聞きづらかった。」「では、ここで交代をしてみてもいい。」

今度は向かい合つて下さい。返事しても相槌を打つてもかまいませんが、視線をそらして下さい。では、はじめて下さい。

感想はいかがですか。「真剣に聞いてくれたようですが少し物足りなかつたです。」「話し手としては聞き手は楽だつたと思われませんが、結局視線をそらすと、話し手の人が話しづらいですね。」では皆さん相手にどんな風な聴き方をしてもらいたかつたですか。どんな風にしてもらつたらうともつと話しやすいと思ひましたか。どんな風にするばもつと話しやすかつたでしょう。

「相手の目を見、相槌を打つて欲しい。」「笑顔、表情を豊かにして欲しい。」「やはり、「よそ見をしている」と自分との話の意識が掴みにくい。」

コミュニケーションに必要なことはアイコンタクト、眉毛、鼻、ネクタイの所を自然に置き、大切な時には目を見る。相手に話して

いるのだという意識を持つて話をする。二つめは「相槌」「うんそうですね。」「というだけではなく、「それは面白いね。それはどうだったの。」「という風な感じ、相手の話を引き出していくような相槌を打つことです。コミュニケーションを上手くやっていく上で相槌はたいせつなものです。次に「表情」です。これは実は聞き手が一生懸命聞いていると相手の気持ちに共感してくるのでですね。自然に共感してきて、そうすると相手を楽しそうな話をしていると、こちらも「よかつたね」と、楽しい顔になります。相手が悲しい話をしたらこつちも「そうだったんだ」と同情してしまつて悲しい顔になるように、表情は自然に変わってきます。

今まで、アイコンタクト、相槌、そして表情、を豊かにしてさらに聞く、というもので、実は話し手も大事なのですが聞き手もどのような風聞いてくれるのかということ、コミュニケーションもまいくかどうかという点で大切なのです。

聞き手としてもう一つ大切なことは、人の話を最後まで聞くということ。途中で割り込んで自分の話に切り替えるをついついしてしまいがちですが、心して人の話を最後まで聞くことが大切になります。聞くつて言う行為がいかにか大切かということになります。

皆さんプリントでは「きく」と言う字が「聴く」になっているのですが(板書)「聞く」との違いはなんでしょうか。どう違うのでしょうか。

「聞く」は只の聞くことです。そうですね。こちらの「聞く」は自然に聞こえてくるので、こちらの「聴く」は耳を傾けてリスナーとしての聴くですね。つまり、コミュニケーションはこちらですね。つまり、耳を傾けて聴くことが大切ですね。そして、余談なんですけれども、その講演をしてくださった方にお礼の手紙やメールをしたりするとき、「昨日は素晴らしいお話を聴かせていただきありがとうございます。」「ありがとうございました。」「文中の「きかせて」を「聴かせて」の文として是非使つて下さい。こちらを使うことで一生懸命聴きましたと言う気持ち自然と文に表れてくるのです。ちよつとしたことですが、こういったところで気を配つたということになりますね。

次に「話し方」です。自分にはものを説明することが上手だと思つて方はいらつしゃいますか。人前で、話をするのが好きな人では嫌な人、苦手な人。皆さんもそうですけど、実際は上手だといふ人が多いのですよ。では、ここで実際「話す」時のポイントをいくつかご紹介いたします。よく言われていることですが、先ず一つ

めは、しつかりした声で・適当な大きさの声で・適度の早さで先ず、話すこと、相手がしつかりと耳で聞くことができなければ話になりません。

二つめは、日本語は語尾で決まります。語尾で肯定文なのか否定文なのかをきまるといいます。語尾までしつかりと話さなければなりません。この文で、お友達と会話をしている「なに？」と時に聞き返される方はいますか。その原因はいろいろあると思いますが、やはり早すぎたりとか、声が小さかつたりとか、語尾がはつきりとしなかつたりとかが原因ですね。

次に「話の内容」のことです。ある程度意見などを述べるときの話し方、そしてポイント、コツをご紹介いたします。

まず、「何を話したいのか」をまとめて、「結論」を先出しする。今から何を話したいのか、それを先に述べます。

そして、他に話すことがある場合、序列をつけて話をする「今からマナーについて話すことがあります。それには三つあります。」先ず三つあるということ、聴く方はあつた三つの点で話をされるのだなと心の準備をされます。そして、一つめはこれです。何故ならこういう訳です。二つめはこれです。なぜならこういう事です。そこで止まつてしまつても聞き手は人間の作用で、三つ目は何だろう

と期待を持つて聴こうとするものです。そこで、三つ目はこれです。何故ならこういう訳であります。というようにします。ということ、話す方は、話しやすくなつてきます。

だから、話に序列をつけることで、聴く方は分かり易く理解しやすくなります。

そして、「一文を短めに」です。最後ですけれど、「ある程度聴く人の立場を考えて、分かり易い言葉で話をする。子どもに話をするのでしたら、子どもに話をするのでしたら、それをかみ砕いて、一般の方にも分かるように話す。」このあたりが、分かり易い話し方をするコツではないかと思ひます。

では、これからは、コミュニケーションのコツに基づき、ゲーム形式を取り入れていきます。「クイズで学ぶ言葉の使い方」

1 敬語編(教育実習生の立場で) それぞれ正しい敬語を使つて正して下さい。

(1) 担任の先生に対して 「先生、先に給食をいただいでください。」

(2) 児童の保護者に対して 「児童のお母さんが参られました。」

(3) 職員室内で仕事をしている担任の先生に対して 「すみません、明日の授業につ



ような位置取りをすることです。用紙の向きはかわっていないですか。「ペンを取って下さい」「相手に『このペンをお使い下さい』と言って渡して下さい。」「ペンの向きはどうですか」「渡す方向があり、手を添えて相手の立場を考えて持ちやすいように渡すことが必要です。」

○×クイズ 「鞆は何処に置くのですか」

鞆を床に置き、コートをきちんとして畳んで自分の後ろに置く・基本的には椅子の上に置いてはいけません。女性の場合は、小さなバッグは後ろに置く。座ったときハンガーがあつたら、ハンガーを使っているのかどうか、

マナーとして相手がどうぞこちらをお使い下さいと言われなかつたら使わないのがルールです。

次に、そのような状態にしている時、コンコンと面接官が入ってきたとき、皆さんはどうしますか。「先ず起立する。その後挨拶をする」

○×クイズ ハガキの扱い方(略)

「マナー」は心遣い

マナーとしては「きれいな言葉」とか「丁寧な言葉をつかう」とか、丁寧な対応をするとかだけではマナーではありません。つまりマナーには心がありません。形だけのマナー、俗に言うマニアックだ

けの通り一遍ものとなります。マナーも相手の心に伝わるマナーでなければマナーをした意味がありません。つまり一生懸命したマナーでも何も意味を持たなくなるのです。

これを是非覚えておいて欲しいと思います。もし、言葉が出てこなくても自分の言葉でいいから相手に優しく伝わるように、相手に丁寧伝えるように相手の立場を考えていった言葉はきつと相手に伝わりやす、そうすることで信頼関係が芽生えてきます。是非心遣いを大切にしたいと思えます。

悪い言葉では無いんですけど、使つてはいけない場面がありますね。例えば、病院で「お迎えに参りました」等、使つてはいけない場面がありますね。

マナーというのは「何時でも何処でも丁寧にきれいな言葉を遣つたらいいのではなくて、その場その場で臨機応変に使つていける能力がなければ、マナーは使いこなせません。」

では、どうすれば臨機応変に使えるかと言えば、これは「何故そうしなければならぬのだらう」ということを先ず分かつてなければ応用がきかなくなるのですね。

何故そうしなければいけないか。それからもう一つ、例えば、例の

いろんなことに遭遇したとき



「何故」ということが分かつてなければ、他の方法でいくらでもできることになります。社会の現場に出ますと新人研修を受けるかもしれませんが、その時その時に教えて頂く基礎という物があります。それだけで実際その通りのものは絶対にはないのです。その都度、マニュアルにはないけれどこの時はどうすればいいのかということが起こってきます。その時には臨機応変に自分の頭で考えていく力が大切になってきます。

ところで、こういう物をお渡ししました。資料のグラフを見て下さい。

会社が採用に当たって重要視したのは、コミュニケーション能力です。人事担当の方とお話ししても、物事で大事にしていることとして話されます。

このコミュニケーション能力の根底にあるものはやはりマナーな

のですね。言葉の使い方であったり、相手を思いやりの気持ちがあつたりとそれに基本的な返事とか挨拶とかができていなければこのコミュニケーション能力は成り立ちません。

次にでてくるのが専門的な能力知識も必要です。主体性、協同性、チャレンジ精神とならんでいきます。つまり、会社が求めるものは、みんなの中でうまくコミュニケーション出来る協調性、個性をもつていける人が重要視されてきます。そして、会社の中でコミュニケーションすることで人から学ぶことができ、主体的、意欲的に働きかけることで自分が成長していくことができるということになります。

コミュニケーション能力、そして主体性が大切なのだということは今からしっかりと頭の隅に置いておいてほしいです。

「日経新聞」より。家族の方とか目上の人との会話が多い人ほど内定率が高いということです。つまり、早い内からいろいろな人とコミュニケーションしていく場を持つことが大切なのです。マナーに関しては知識だけではありません。それが実践に生きていなければいけないのです。自然に身に付いてきているという形になつていなければなりません。その為に、必要なのは学内に於いては教授の方との接触を多く持ち、その方々との対応の中でマ

ナーを実践してみる。言葉遣いもそうですし、いろんな面はそうです。

学校外に於いては、アルバイトもそうですし、実習生としての対応もそうですし、そういうところで心してマナーに配慮し実践してみよう。そうすることで、相手からの反応が返ってきます。自分がやったことに対して反応があります。「おはようございます。」と言ったときに、たいした反応がなければ、それは相手に伝わってなかったということなんです。ではどうすればいいのか。その時元氣よく明るく「おはようございます。」と言つたら、きつといい反応が返ってくるはずなんです。

そういう形で今の内から行動していたとくと将来皆様はこの大学生活を終えて社会に羽ばたいて行くとき、何らかの良き結果が生まれてくるのではないのでしょうか。

はい、時間も過ぎてきました。皆様がこれから益々大学生活をエンジョイされて将来に夢をもつて一層活躍されることをお祈りしております。二時間という長時間ご協力して下さいありがとうございました。



「愛媛大学教育学部サポーター制度」より

### 講義内容掲載のお知らせ

#### 同学部同窓生の 久保美智代さんが講義（第五回）

この講座は、同窓生を中心に多方面から学生に対する支援をお願いする『教育学部サポーター制度』の取り組みとして昨年度からスタートし、今回の講義が五回目です。一回生から四回生の約百名の学生が参加しました。

平成二十二年七月一日（木）に、教育学部大講義室で、旅する世界遺産研究家、キャスター、アナウンサーとして活躍の久保美智代さんをお招きし、「魅力的な世界遺産を学ぶ旅講座」が開催されました。

講師の久保さんは、本学部卒業後、愛媛朝日テレビにアナウンサー第一期生として入社、「ニュースステーション」（テレビ朝日）校中継でデビュー、その後、独立し、現在は旅する世界遺産研究家として世界遺産を二百九十カ所以上訪問し、その魅力について全国各地で講演活動を行っていらっしゃいます。

講義は、まず、久保さんのプロフィール紹介から始まり、アナウンサーの就職面接時の体験談や、

社会人として自己アピールする方法、人に何かを伝える時のポイントについてアドバイスがありました。また、人生において「無駄」に思えることはなく、以前したことがどこかでつながっていくこと、勉強でも趣味でも何でもいから続けることが今後の人生にプラスになると熱く語っておられました。

次に、久保さんの撮った多数の写真を基に、世界遺産は八百九十ヶ所あること、文化遺産・自然遺産・複合遺産の三種類があり、有形の不動産が対象となっていることが紹介されました。しかし、中には武力紛争、自然災害、大規模工事等などにより、その普遍的価値を損なうような重大な危機にさらされている「危機遺産」が現在三十一件あることや、「原爆ドーム」や「アウシュビッツ強制収容所」など「負の遺産」と呼ばれるものがあることが紹介されました。

また、ユネスコ憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれ

るものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」と記載されており、世界遺産を通して、その国の文化・歴史を知り、人々を知ること、仲良くなることで、戦争をしたくないと思うようになって欲しいと語っておられました。

世界各地を巡りながら活躍されている久保さんの生の旅体験を聴くことにより、学生たちは、「実際に体験すること」の大事さ、社会人に求められている幅広い教養や人間関係を身につける必要性

#### 教育学部で同学部同窓生の 合田みゆきさんが講義（第六回）

平成二十二年十一月十一日（木）に、教育学部大講義室で、フリーアナウンサーの合田みゆきさんをお招きし、「魅力的な話し方講座」が開催されました。

合田さんは、昨年度に引き続き二回目の登場です。「話のプロ」の立場から、話し方、表情、仕草などを含めたコミュニケーションスキルについてお話頂いた前回の内容をさらに充実・発展させて、普段の生活から就職活動まで役立つ内容でお話いただきました。

講義は、まず「笑顔の練習」から始まり、次に「発声練習」を行

を感じることができたことと思います。



世界遺産の種類や数を説明中

いました。初めは声が出なかった学生も、練習を重ねることに大きくハキハキとした声が出せるようになりました。

続いて、「読みの練習」がありました。ニュース原稿を読む時は、一番伝えたい部分を意識して読むことや、句読点では必ず区切る必要はなく、ひとつの文章を長く読んで意味が繋がるように読むことが大切なことであり、このことはより良いプレゼンテーションに役立つことなどを話されました。また、「おむすびころりん」を題材に、物語を読み聞かせる際

には、その情景をイメージしながら読むと、聞き手により伝わりやすいことを話された後、実際に放送研究会の学生が物語を読む場面があり、感情のこもった読み方に、周りの学生から拍手が上がりました。次に現役アナウンサーとして活躍されている合田さんの読み聞かせがあり、プロの読み方に学生達は聞き入っていました。

次に、コミュニケーションワークとして、二人一組になり、お互いの共通点を見つけるため聞き上手になること、相手の話をしっかりと受け止める話し方などを実践してスキルアップのための練習を行いました。

最後に、社会人になっていく為に、自分を信じ、反省し、前向きに（傷つくことを恐れず）進んで行って下さい、とアドバイスがありました。



講義風景

# 職場だより



## 私の活用力



東温市  
南吉井小教諭  
野中 真悠  
(平二二卒)

愛媛大学を卒業して、もうすぐ二年が経とうとしています。新採二年目としての教員生活が、あまりに多忙で、多難であったせいか、大学生活を送っていたのが、遠い昔のようです。

大学生活を振り返って、一番強く感じることは、果たしてあの四年間は、今の私自身の生活にとって、意味あるものになっているのだろうかということ。子どもたちの学習においては、習得・活用が重要だと言われていますが、自分自身についてはどうだろうか、と考えてしまいます。決して、大学での学びが無意味であったという問題ではなく、自分が有意味にできているのかという問題です。

先日、たまたまテレビを見て

いて、NHKの「ハーバード白熱教室」という番組を目にしました。「創立一六三六年、アメリカ建国よりも古いハーバード大学の歴史上、履修学生の数が最高記録を更新した授業がある。政治哲学のマイケル・サンデル教授の授業『Justice (正義)』である。大学の劇場でもある大教室は、毎回千人を超える学生がぎっしり埋まる。あまりの人気ぶりにハーバード大学では、授業非公開という原則を覆し、この授業の公開に踏み切った。ハーバード大学の授業が一般の目に触れるのは、史上初めてのことである。サンデル教授は、私たちが日々の生活の中で直面する難問において、『君ならどうするか？何が正しい行いなのか？その理由は？』と、学生に投げかけ、活発な議論を引き出し、その判断の倫理的正当性を問うていく。マイケル・ジョーダンやビル・ゲイツはその仕事で、すでに社会に貢献しているのに、なぜ税金を納めなければならないのか。まだ代理出産、同性愛結婚、人権など、最近のアメリカ社会を揺るがす倫理

問題も題材となる。絶対的な答えがないこのような問題に、世界から選りすぐられた、さまざまな人種、社会的背景を持った学生が、大教室で意見を戦わせる授業は、ソクラテス方式（講義ではなく、教員と学生との闊達な対話で進められる授業形式）の教育の最高の実例と言われている。」  
(NHKの当番組ホームページ <http://www.nhk.or.jp/harvard/about.html>を参照)

この番組を見たとき、大学三年生のときに受講した「哲学I」の授業を思い出しました。その授業は、講義ではなく、学生がおすすめの本や歌詞の中から、私たちが日々の生活の中で直面する難題を取り出し、そのテーマについて、九十分間授業をするというものでした。「哲学の授業なのに、なんで模擬授業のようなことをするんだろう。」と、ぶつぶつ言いながら、自分の授業日に向けて、必死に準備をしました。私は、確かイプセソンの「人形の家」からテーマを出して、授業をしました。意見を聞いて、発言者の意図を汲み取りつつ、ポイントをおさえて、瞬時に板書することの難しさ、出された意見をまとめて、すぐに次の問いを提起することの難しさ、そして

何より、考える必然性のある問題をしっかりと取り上げて授業を構成することの難しさを痛感しました。

ハーバード白熱教室におけるサンデル教授は、これらを見事にやっけていました。私が見たときは、「イチローの年俸は高すぎないか？」という、正義とは無関係と思われるようなテーマから始まり、オバマ大統領などの収入を比較しながら、富の格差について議論を進めていきました。最終的に、学生から出たさまざまな意見を、最大多数の最大幸福・「功利主義」(ジェレミー・ベンサム)の考え方、人間の尊厳に価値を置くこと(カント)、美德と共通善

をはぐくむこと(アリストテレス)という三つの伝統的な正義の考え方に分類していきました。一切のメモをせずに、それぞれの発言者の意見を聞き、その中で述べられていることを、講義の主題である「正義とは何か？」につなげていく。しかも、発言者の哲学的理論の基となる考えも示しながら。巧みな授業ライブを見て、正にこれこそがめざすべき授業の在り方だと痛感しました。と同時に、先ほど述べた、大学時の「哲学I」の講義を思い出し、「あのときの授業は、このような意味をもっていたのか。」と、改めて気付かされました。

大学で学んだことは、もっともっと今の私自身に活用されるべきなのではないかと、ひしひし感じています。教育学部で四年間学んだことの中には、おそらく私が気付いていないだろう、たくさんの活用されるべき、知識・技能が眠っているのだと思います。あの四年間は無駄だったということにならないよう、私自身の「活用力」を磨いていきたいと思えます。



791-0222 東温市下林

甲一九九九

経験と学びの日々



愛南町・篠山小教諭  
山本 直也  
(平九卒)

私が教員採用試験で良い結果だったとの朗報を受けたのは、奈良県で昼食をとっている時のことだった。当時、講師として勤務していた学校で修学旅行の引率をしている最中のことだ。その時のうれしかった気持ちやその場に一緒にいた先生方が我がことのように喜んでくださったことを今でもはっきりと覚えている。

その次の年の四月から、私の新規採用教員としての生活がスタートした。初任校は住み慣れた南予を遠く離れた東予の中学校だった。そして、それは経験と学びの日々の始まりでもあった。

学校という世界では、小学生・中学生・高校生として十二年間過ごしているはずなのに、教師として過ごす学校は全くの別世界のように見えた。何もかもが懐かしいと同時に新しいことの連続だった。今回はその中で経験し、学んだことを少しづつ書いていこうと思う。

初任校で印象深かったのは次のようなことである。

初任校は一学年六〜八クラスある大規模校であった。そのため、年度当初に数名の教員が集まり、

時間割の編成チームが組まれる。私もその一員として時間割の編成を手伝うこととなった。その中で時間割の編成はただ教科を組み合わせていけばよいのではないことに気付かされた。午前中に空き時間を必ず入れること、先生方の負担をなるべく減らすこと等、紙の上だけではなく、実際の学校生活を考慮に入れて時間割は組まれていた。「時間割を見れば、その学校のことが全てわかる。」という主任の言葉が時間割の大切さを物語っていた。

また、初任校では人権・同和教育が盛んに行われていた。そのため、人権・同和教育について考える機会に恵まれていた。私はそれまで恥ずかしながら人権・同和問題は自分には関係のないことだと思っていた。しかし、校内での研修や校外での学習会で学ぶにつれて自分の考えが間違っていることに気付かされた。「差別は身分制度によって作られたのではない。人の中にある差別する心が作っているのだ。」という考え方を教わった時、自分の中で差別に対する考え方が大きく変わった。学び続けることの大切さを実感した時でもあった。

さらに、初任校では生徒指導についても考えさせられた。当時その中学校で生徒指導主任をされていた先生はとても人間味あふれる、魅力的な方だった。厳しさの中にも温かさがあり、生徒と真剣に向き合うその先生の姿を見ながら、「自分もあの先生のようにな

りたい。」と自分の目標としていた。そして、その先生を含めいろいろな先生方から生徒指導において大切なことを学んだ。それは、学校という組織として生徒指導を行うということである。初任して間もないころ、自分一人の勝手な判断で生徒指導を行い、生徒との人間関係が悪くなったことがあった。全校で共通した指導を行わないといけない事を実感した時であった。また、生徒指導上の問題が起こった時、その学校では主任の先生が先生方の役割分担を行い、学年単位、学校単位で対応をしていた。自分一人に対応するのではなく、他の先生方と報告・連絡・相談をしながら協力することを身をもって学ぶことができた。

初任校で四年間過ごした後、私は生まれ育った南予に戻ってきた。南予の小学校に赴任した私は特別支援学級の担任をすることになった。特別支援教育に本格的に取り組むのはその時が初めてであった。初任校では一クラス三十五人だったのが、その時目の前にいたのは一人。しかし、その一人と向き合って学校生活を送っているうちに、自分が今まで児童や生徒一人一人のことをよく見ていなかったことに気付いた。子どもは言葉だけでなく表情や仕草でいろいろなサインを出している。自分はそのサインをどれだけ読み取って、子どもに言葉や表情を返すことができていたか。また、目の前で学習内容が身に付かない子ども

がいた時に自分の授業が子どもの実態にに応じていなかったにも関わらず、子どものせいにしていないか。「特別支援教育は教育の原点である」とよく言われるが、そのことを痛感した。それから六年経った現在も特別支援学級の担任をしている。

今年、教員になってから十年目を迎え、十年研を受ける年齢となった。十年前と今の自分を比べた時にどこが変わったかは実際のところよく分からない。ただ言えるのは今まで経験し、学んできたことは確実に私の中に残って、教師としての私を作ってくれているということである。今後もしいろいろなことを経験し、その度に多くのことを学んでいこうと思う。一日一日をしつかりと過ごしていきたい。

798-4110  
南宇和郡愛南町御荘  
平城四一九一番地六



表紙写真について

「幻想の世界」

撮影者

愛媛大学教育学部附属  
特別支援学校  
教諭(部内教頭)

阿部 修一  
(昭五二卒)

写真はフィンランドのヘルシンキ港の初冬の夕景です。「バルト海の白い乙女」という名のごとく、森と湖の国の首都にふさわしい港でした。初冬にしてはめずらしく、満月が海面に映り空と海の青さ、そして街の灯りが見事にマッチして幻想的な世界を醸し出していました。この国はサンタクロースと妖精ムーミンが有名ですが、この景色を見ているとムーミンやサンタクロースが実在しても不思議ではない気になりました。写真はスウェーデンのストックホルムに向かう二隻の客船のうちシリアラインの客船から撮ったものです。写っているのは同じ時間に航路を航行するバイキングラインの客船です。バルト海は美しく神秘的ですが、そこは北欧の海ですから海水温が低く、緊急時には素早い対応が必要となります。そのため、常にお互いが連携しあえるように運行してより安全性を確保しているので

熱き心



神野 誠 (平一 二卒)

西条市

西条南中教諭

三年一組、三位でゴール。本年度行われた本校体育大会、むかで競走の結果である。勝ったクラスは抱き合って喜び、嬉し涙を流していた。負けたクラスの生徒たちは、一様に悔し涙を流していた。

本校のむかで競走は他校ではあまり見られない、男女のリレー形式で行われる。ゆえに、男女のどちらにも速くなければ栄冠を勝ち得ることはできない。また、体育大会では一番の花形であり、毎年、

一、二年生や観客の方々にも感動を与える競技となっている。過去に、そのような先輩たちのむかで競走を見て感動し、魅了されて、「自分たちも、先輩たちのようなむかで競走がしたい」と思いを募らせてきた。だから、三年生は明けても暮れてもむかで競走ばかり練習するのである。

これは本校の特色か、それとも学年の特色か、それとも我が三年一組だけの特色か、学校行事に対する思い入れは、男子よりも女子

の方が圧倒的に強く、女子は練習初日から燃えていた。それを冷靜な目で見守る男子。ちよつと嫌な予感が……。

女子は、何とか速く走りたい一心で、試行錯誤を繰り返して、自分たちで練習に取り組んでいった。その甲斐あって、女子は目を追うごとに息が合い、足も合い、ころぶ回数もどんどん減り、スピードも増していった。朝や放課後も、どのクラスよりも早くグラウンドに飛び出し練習を開始した。本当に頼もしい限りであった。

一方、男子はというと、今ひとつまとまりがない。朝練や放課後練習も、出足が鈍く、いざ動き出しても、息も合わないし、足も合わない。女子とは対照的に、全く上達しなかった。

そんな中で行われた、学年練習での一回目の勝負。スタートは女子でトラックを一周、男子はタスキをもらってトラックを一周半走ることになっている。ちなみにこの日まで、男子は一周半どころか一周すら完走したことがなかった。そして、スタートのピストルが鳴る。女子は一組を含め、三クラスが転倒し、三番で男子にタスキが渡る。男子は練習通り、足が全く合わない。しかし、いつころぶかという心配をよそに、なぜか

一周半を完走してしまう。不思議でならなかった。

その後の練習で、女子はさらにスピードアップを目指し、ピストルと同時にダッシュする練習を始め、見事に身につけた。向上心旺盛である。一方の男子は、「俺たちは本番に強い」と、妙な勘違いをしてしまい、まだまだ熱の帯びた練習とはならなかった。もちろん、熱心に頑張っている男子もいたが……。

そして迎えた二回目の勝負。女子のスタートダッシュは完璧で、一度も先頭を譲らず男子にタスキリレー。そして男子。ちなみに一周半走りきった経験は、前回勝負の一回のみ。相変わらず足は合っていない。しかしである。今回も、



ころばずに完走。しかも一位のおまけつきで。本当にこれでいいのだろうか、いや、よくない。でもいいのかなあ、と自問自答してしまった。

そしていよいよ体育大会当日を迎えることになる。本番までには、何とか男子も一周半を完走できるようなにはなっていた。

いよいよむかで競走。ここまでの結果で、既に一組に総合優勝の可能性はなくなっていた。だから尚更、生徒も私も勝ちたいという気持ちが強かった。女子がスタート位置に立ち、開始十秒前の合図で全体が静寂に包まれる。そして運命のピストルが鳴る。「バンッ」「いち、に、いち、に。」スタートダッシュは完璧で、第一コーナーを取る。そのままバックスタートを駆け抜ける。「これはいける。」と思つたが、足が乱れてきている。「何とか男子の所まで行つてくれ。」と、心の中で叫びつつ併走する。あと三十メートル、二十、十五、しかしこらえきれずに転倒してしまった。後続に抜かれ、それでも三位でタスキをつなぐ。タスキを受け取った男子は、女子のミスを取り戻そうと必死に走る。今までに見られなかった表情だ。女子も続々と男子の下に駆けつけ、併走し、一緒に声を

出す。クラスが一つになった瞬間だった。そして男子は、私と女子の期待に答え、今回もまた見事に完走したのである。

ゴールした時には、男子も女子も目には涙が浮かんでいた。一生懸命努力してきた女子が転倒し、お世辞にも熱心だったとはいえない男子が完走。皮肉な結果ではあるが、男子にもやはりそれなりの思いはあったのだろう。肩を落とし退場していくみんなの後ろ姿を見てみると、私の目にも涙が浮かんできた。やっぱり勝たせてあげたかったなあ。みんな喜び合いたかったなあ。そんな思いに包まれた。今まで何度となく体育大会を経験してきたが、涙がこぼれそうになったのは今回が初めてである。

熱い戦いは終わった。残す行事は文化祭での合唱コンクールだけである。次は一体どんなドラマが待ち受けているのだろうか。

「三年一組のみんな、感動をありがとう。次の合唱コンクールこそは、絶対グランプリをゲットしような。」

799-1371

西条市周布

一七二九一〇三三

# NPOが社会を変える！



NPO職員  
吉武 優子  
(平八卒)

NPOで働き始めて十年になる。当初は「NPO？何それ？」と言われたものだが、今はマスメディアへの露出も増え、「NPO」というワードは老若男女に浸透している。身の回りの様々な社会問題を「他人ごと」とせず、市民目線できめ細かく対応するNPO。NPOによる多様な活動が地域の中に存在することによって、社会の豊かさが育まれるということを感じてきた。日常的に多くの活動の担い手に出会い、自分も活動に関わることで気づいたことがある。少数の人々の勇気ある行動が社会の常識を変えていくことを。たった一人の思いを大切にする過程で新しい価値観が生まれることを。固定観念に捉われてしまっていないか。多数派になることに慣れてしまっていないか。自問する瞬間でもある。



「いまばり夢学校」。こうした気づきを生む現場の一つである。NPOの活動の意義や魅力を子ども達に伝え、子ども達自らが主体的に学

ぶ「地域の学校」。そんなコンセプトで二〇〇三年から不定期に開校してきた。よりよいまちにしたいと活動するNPO。その活動は、未来を創る活動と言える。未来の大人である子ども達には大いに関係する活動なのだ。子ども達は、自分たちの身近に起きている問題を、きつと大人と同じように、いや大人以上に真剣に解決したいと願っているにちがいない。ただ、現実には、NPOの活動に子ども達の参画する姿はなかなか見られない。大人と子どもが対等に参画する場が欲しい、そんな願いで開校した。



学びのフィールドは自分の住むまちである。身近なまちの中で、NPOが子ども達に体験型のプログラムを数回にわたり提供していく。福祉、文化伝承、環境保全など、プログラムは多岐にわたる。参加する子ども達の年齢も学校も様々。「親にすすめられたから」「友達に誘われたから」と、自発性の弱い参加者も含め、参加動機も多様なものである。初回の集まりの時に、子ども達の思いや情熱を引き出す工夫としてある。しなやかさをしている。それは、自分達がこれから学ぶプログラムの内容を、自分達が決めるというものである。NPO、つまり大人にプログラムの内容を子ども達の前でプレゼンテーションしてもらい、どのプログラムに参加したいかを選ぶのだ。公開プレゼンテーションさながらの入学式で子ども達は審査員になる。

さて、では、その審査現場とは？思い浮かべて欲しい。「何かを選ぶ」、「みんな決めて」、「どんな手法があるだろうか？」「じゃんけん」、「多数決」、「くじ引き」……、時には何かの圧力で決まってしまう、そんなことに慣れてしまっている日常があることにはっとする。「夢学校」では、とことん話し合ってみることをルールにした。NPOのプレゼンテーションを聞く。そして、それについての感想や意見を自分の中に持つ。グループに分かれ、子ども達は自分の言葉で仲間へ考えを伝え、また仲間の考えに耳を傾ける。話し合いで、皆が納得する総意を導くことは、想像以上に大変だった。話し合いは三時間以上に及ぶことも……。自分が「興味がある」と思ったプログラムも別の人は「魅力的でない」と言う。そんな中でみんなにとって大事なことを決めていく。

このプロセスは実に学びが多い。場をコーディネートするのは高校生の役割である。子ども達が意見を言いやすい雰囲気をつくり、少数意見についてもその意味するところを導く質問を投げかける。入口の「楽しさ」だけではなく、「普段できない体験か」「物の見方が広がるか」等、自己変容による「楽しさ」を体感できるプログラムはどのようなものかを考えるきっかけをつくるのも彼らの役割だ。正直、高校生コーディネーターはヘトヘト。グループをまとめ、一つの合意を導いていく中で、彼らはリーダーとして成長していく。プレゼンテーションをした大人は、固唾をのんで見守っているのだが、これまた実りが多い。「二つのプログラムをくっつけてやりたい」と、NPOのコラボレーションを望む意見が飛び出すなど、子ども達の斬新な意見は活動へのヒントになることもしばしばだからだ。そう、子ども達の学びの現場は、すっかり大人達の学びの現場に早変わり。「いろいろ意見を出し合って、みんなが悩んだ。」「グループのみんながバラバラになる時もあったけど、みんなが決められた。」自分達で合意を導いた自信溢れる顔つきの子ども達の感想には勇気ももらう。長時間の話し合いの場ながら、凛とした集中の糸が途切れないことも脱帽だ。



大人と子どもの対等な参画、それはまちを豊かにするキーワードの一つであろう。NPOの活動から聞こえてくる声の中にも、放課後の安心安全を望む住民、学校に行きにくかったり、ひきこもりに悩んだりする保護者など、子どもを取り巻く環境についての課題は多い。子ども達も一緒に、自分を取り巻く問題に気づき、大人と協力して、解決の糸口を見出すことが大切なのかもしれない。ただ、言うは易し。自分も子どもを授かってみと思うのだが、今、親、学校や塾の先生以外の大人と話したことがない子どもが意外と多いのではないだろうか。逆を言えば、地域の大人も子どもとのコミュニケーションを奪われているのが現状のようだ。子どもの方から「地域活動に参加したい」、「まちづくりに興味がある」などという声が自然に出てくることは想定されればと願う。

全国NPO法人数は四万団体を超え、愛媛県でも三百を超えるNPO法人が活動している。法人格を持たず活動する団体も多いことを考えると、かなり身近な存在となっている。皆さんも是非、興味のある分野の活動に参加してみたい。意思ある参加が社会を変える！

794-0026 今治市別宮町七丁目  
二一八



# 学内最近のニュース

## 「第一回愛媛大学ホームカミングデイ」が

開催されました

平成二十二年十一月十二日（金）、十三日（土）の二日間、「愛大は、あなたに会いたい」をキャッチフレーズにホームカミングデイを開催し、卒業生、教職員約二百人が参加しました。

参加者相互の親睦を図ると共に、大学の最近の動向などの情報提供、転職・再就職等に際しての就職支援サービスを実施することを目的に、学生祭の日にあわせてホームカミングデイを開催しました。

下記日程のようにホームカミングデイ関連事業として、十二日（金）には就職相談会を、十三日（土）には、県立三島高校書道部による書道パフォーマンス、古今亭菊志ん師匠（教育学部OB）による落語、岳人山氏（農学研究科OB）による尺八の演奏が行われました。

また、夕方から南加記念ホールで開催された記念式典では、柳澤康信学長から歓迎の挨拶と大学の



三島高校書道部による書道パフォーマンス

近況報告が行われ、卒業生は現在の愛媛大学の状況に耳を傾けていました。

その後、大学会館に移動して懇親会が行われ、卒業生は年代を越えて、改めて交流を深めていました。



記念式典で大学の近況を説明する柳澤学長



懇親会で皆さん交流を深めていました

【11月12日（金） 就職相談会】

【11月13日（土）の主なイベント】

10：00-12：00 学生祭見学、ミュージアム見学

13：30-14：00 書道パフォーマンス 書道ガールズ（三島高等学校）

【会場：ミュージアム中庭（雨天 第1体育館）】

14：00-15：00 学生祭見学、ミュージアム見学

15：00-15：50 落語 古今亭菊志ん（教育学部OB）

【会場：南加記念ホール】

16：00-16：50 尺八演奏 岳人山（農学研究科OB）

【会場：南加記念ホール】

17：00 第1回愛媛大学ホームカミングデイ開催記念式典  
懇親会

【会場：南加記念ホール】

【会場：大学会館1階】

### 教育学部留学生歓迎会を開催

平成22年10月7日（木）、愛媛大学校友会館において、教育学部留学生歓迎会（後学期）が開催されました。

教育学部では、前学期・後学期の学期始めに留学生と教育学部長、指導教員、留学生チューター、事務職員などが一同に集い、留学生歓迎会を開催しております。

本学部留学生は、後学期から新たに6名を迎え、現在23名が在籍しています。

歓迎会は、40名近くが参集し、校友会館二階のサロンにおいて、12時10分から立食パーティー形式で行われました。

最初に教育学部長の挨拶があり、10月に来日した留学生がそれぞれ流暢な日本語で自己紹介を行いました。その後、和やかな雰囲気の中、パーティーが行われました。留学生、チューターの学生さん達はお互いに自己紹介をしたり、記念撮影などをして交友を深めていました。



パーティ風景 (1)



パーティ風景 (2)

### 三輪田米山 展

H22年8月25日(水) ~H23年3月31日(木)  
第一回 三輪田米山の書



米山代表作品

### 第1回三輪田米山展を開催中

愛媛大学ミュージアムでは、開館一周年記念事業として、図書館が所蔵する三輪田米山（みわだべいざん）の書や日記などの貴重資料を展示し、平成二十二年八月二十五日（水）から平成二十三年三月三十一日（木）までの間、「三輪田米山展」を開催しています。

この三輪田米山展は、平成二十五年年度までの毎年九月から三月まで、

四年間で計四回実施する予定で、第一回である今回は、「三輪田米山の書」と銘打ち、米山の人となりや書などの作品、愛媛大学との繋がりや米山の魅力を紹介します。

また、図書館二階西エリアにおいても米山コーナーを常設し、米山日記のレプリカや関連図書を展示・閲覧出来るようになっていきますので、是非ご覧下さい。

開催場所	愛媛大学ミュージアム（松山市文京町3番）
開催期間	平成22年8月25日（水）～平成23年3月31日（木）
入館料	無 料
開館時間	午前10時～午後4時30分（入館は午後4時まで）
休館日	(1) 火曜日 (2) 年末年始（12月28日～1月4日） メンテナンス休館（2月1日～15日）など

川柳

文芸



終章の画布



栗田 忠士  
(昭三五卒)

ミツバチのタッチへ花のお接待  
 爆笑の中でピエロの独り言  
 人間が割り切れますかロダン像  
 一夜干しされ本当の味になる  
 すぐそこがなかなか着かぬ山の道  
 妥協した喉へ小骨が引つかかる  
 控えめに咲いて日陰の花でいる  
 触れなくてほしい所に触れたがる  
 躓いたミリの段差に笑われる

上り坂一服したい八合目

引き算で明日の力は湧いてこぬ

一足す一がせめて二になるよう生  
きる

登りきった坂の向こうに見た花野

夕焼け小焼け明日を信じて米を研

ぐ

終章の画布へ一本線を足す



791-0101 松山市溝辺町

甲六二〇



絵手紙

遊ぶ、絵手紙の世界で



井上 弘子  
(昭四五卒)

退職してスローライフを楽しんで  
 いた私の眼に、「しみずの福祉  
 だより」が映った。ふれあい教室  
 の会員募集があった。三十八年間、  
 幸せな教員生活を送らせていただ  
 き、感謝の気持ちでいっぱいだっ  
 た。皆様のお陰である。

今からは、地域の一員となり、  
 苦手だけれどしてみたかった絵手  
 紙を教えていただこうと思った。

誰も知っている人はいない教  
 室、先生と呼ばれない教室、自由  
 で和気あいあいとした教室、とて  
 も居心地がよい。魅力ある先生の  
 下で、月二回絵手紙を楽しんでい



る。「よし、今週はこれを描きた  
い。」という思いで草花・野菜・  
生活用品などを見つめている。

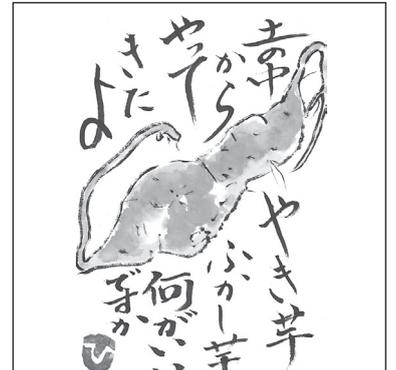
絵手紙の世界で遊びながら、自  
分を見つめ、自然を見つめて、交  
友を広めたいと思っている。

まだまだ未熟であるが、「あな  
たらしい絵手紙をありがとう。」  
と言われる度にうれしくなり、  
ずっと続けようと思っている。

790-0806

松山市緑町二丁目

六一二九



俳句

俳句とわたし



白石 美子

(昭二六卒)

めくばせのなみなみ注げと年酒かな  
寒泳の一札をもて水を出る  
色をひとつに紅梅の盛りなり  
どの石も表を前に黄水仙  
助詞ひとつ直せし夜の朧かな  
水槽の稚魚の目丸し仏生会  
若芝に寝て青空のど真中  
寺の戸の片手に重し走り梅雨  
おほかたはとどかぬ草矢放ちけり  
鶏の砂浴びてをり立葵  
右寄りのかれひの目玉原爆忌  
落差一気に滝音の果もなく

土用芽の赤に力のありにけり  
漬物の今朝の歯ざはり涼新た  
不用意に転がる鉢はたた神  
暮れてなほ川面の光る下り簾  
搗きたてをはふはふと吹き亥の子餅  
空港の朝日あまねし草紅葉  
くぐり戸の華やいでをり牡丹雪  
風に芯ある極月の大師堂

——\*——\*——

夫の参加する句会について行つた  
のが俳句との出会いとなり、それが  
私の晩学の始まりとなりました。  
平成十一年樗入会、主宰阪本謙二  
先生に師事、現在に至っております。  
阪本先生は、実に人間味豊かで、い  
つも懇切、しかも温かくそのご指導  
は、俳句のみならず人間としての生  
き方に及びます。  
入門以来私は、学び知る楽しさ、  
味わう喜び、創る愉しさを覚えまし



た。生活の中で自然や物、事からた  
まわる詩情を、素直に受け止め、構  
えず、気負いなく自然体で臨む句作  
りは、魅力ある無限の世界です。  
愛媛に生まれ、大洲に育ち、地域  
に生きる者の生きた証しとして、不  
器用ながら今を生きる者としての考  
え方や行動、物の見方には、私の全  
生活が土台となっています。  
つまり句作りは、私の生きざまそ  
のものです。  
私は、今後もありのままに誠実に  
向き合い、仲間との出会いを感謝し  
ながら、俳句を暮しの中心に据え、  
あせらず、あわてず、あなどらず精  
進したいと思っています。

(☎) 795-0025 大州市阿蔵

甲一八五九一五

短歌

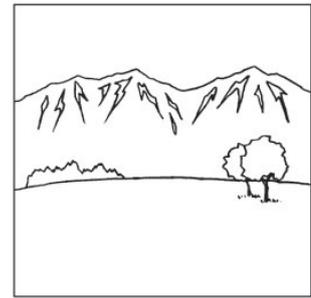
教師遍歴



吉田 修 (昭三〇卒)

回想も悲憤は湧きぬクローバの白  
き花咲く練兵場跡

図書館の帰途大学の静かなる夕暮  
れ時を螢飛び交う(城北)  
赴任地は学びし母校担任の守口先  
生校長になられ  
教科書を風呂敷に包み登校する子  
もあり漁村の生活貧し(西海)  
四月なれど三坂下りし久万の駅バ  
スを待ちつつ炭火にあたる  
遠近に鶯聴きつ山三里歩きて子等  
の家庭訪問(美川)  
別れの曲ホームに流れ故郷去る集  
団就職の生徒は嗚咽す  
転任の荷物手伝う生徒等の心根う  
れし春の惜別(柳谷)  
海暮れてキャンプの焚火燃え盛か  
り校歌を歌う生徒を火照らす  
元旦の遙かな想い紺青の斎の灘は  
陽光に映ゆ(内宮)  
体弱き女生徒の荷も背負いつつ皿  
が嶺路をいたわりて行く  
生徒等と彼岸花咲く里道に亡き師  
の柩を声なく送る(砥部)  
白墨の混り乾きて板書する音軽や  
かに梅雨明けの教室  
勤め終え自転車を押す八倉坂夕は  
しきりに法師蟬鳴く(北伊予)  
花冷えの一日を慣れず緊張す研究  
主事の辞令受領し  
県下から集う若き教師らの指導に  
当たる研修講座(教育センター)



(☎) 791-1212 伊予郡砥部町重光

一八八一九

温かくストーブ燃える教室の窓に  
山里の雪景色映ゆ  
子供らと休みて登る皿が嶺木の実  
も食べてゆく秋惜しむ(重信)  
喚声の響きしプール夜に入りて乱  
舞す螢の火影を映す  
校庭に甲旗はたれて雨に濡れ昭和  
最期の山の沈黙(中山)  
くたくたに疲れし後に歓喜湧く  
三十キロを生徒と歩いて  
退職の日の二十四時校長の責めを  
果たして安堵して寝る(松前)  
——\*——\*——  
私が短歌の創作を始めたのは、  
高校の頃かと思う。今それらを読  
み返してみると自分なりに歩いて  
きた人生の哀歓が、その時その時  
の出来事として、生き物のように  
私の心に語りかけてくる。

水墨画

ふる里を思う

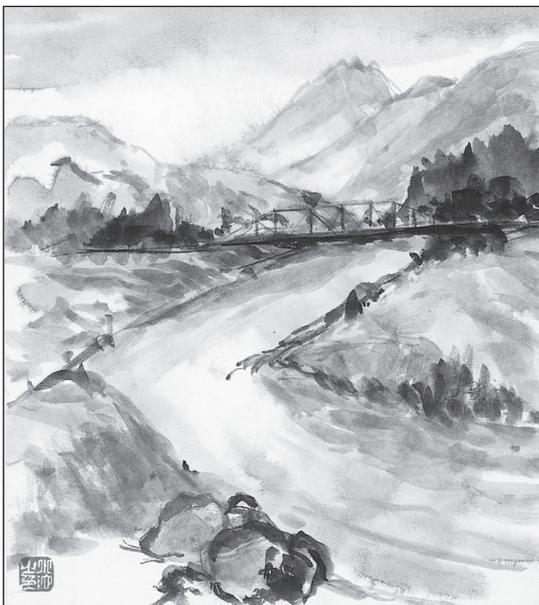
小池 郁子(山岡)

(昭四三卒)

山や川、田畑に囲まれ、両親や兄弟と共に平凡に暮らしていた頃が本当に懐かしく感じられるこの頃である。

今は母を亡くし、父は施設に入所しているため、ふる里の家は廃屋になりつつある。人が住まなくなったとたん、どくだみやシダのような今まで見慣れない草が我が物顔で生い茂っているのに驚かされる。一ヶ月に一、二度それらの草を引いたり、畑に農作物を植えたりと両親の遺したものを細々と受け継いでいる。

そこで心安らく田舎の風景画に最近挑戦している所である。見た感じを描くことは相当難しい。太い線と細い線で輪郭を描くのだが、手前ほど広くしたり長くしたりする遠近感を出すのに苦労している。しかし濃淡の変化を作ることによって奥行き表現ができた。ボリウム感が出たりすると本当に嬉しい。これからも楽しみながら歩いてゆけたらと思っている。



放送大学四月入学生募集のお知らせ

放送大学では、平成二十三年四月入学生を募集中です。

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では、心理学・福祉・文学など、幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、教員免許更新が可能です。

資料を無料でさし上げておきます。お気軽に、愛媛学習センターにご請求下さい。

放送大学

知識が人生を変えていく

一科目からでも学べます

平成23年度4月入学生募集中！  
(平成23年2月28日まで)



愛媛学習センター  
(愛媛大学内)

TEL 089-923-8544



# 先輩を偲ぶ

独学で教師を目指した

森岡敦栄先生百九年の足跡(十二)



上甲 修  
(昭二九卒)

反骨の人・気骨の人

昭和二十二年四月、森岡先生は出身地の佐礼谷小学校に帰って来た。

戦後、文部省は全国の小中高校に父母と教師の会(P.T.A)を組織するようにという通達を出した。

しかし、森岡校長は、学校の後援会組織にP.T.Aという名称は使用しませんでした。理由として学校は村全体の共有財産であるから「佐礼谷教育後援会」という名称にして村全体の方に会員になってもらい、財政的にも支援して頂く



森岡先生

う、と考え、村の人達はそれを受け入れたのです。

昭和四十五年、佐礼谷中学校が老朽化し生徒数も減ってきているので、町としては佐礼谷中学校を中山中学校に吸収合併する方針を打ち出した。それで町の理事者が佐礼谷の集落ごと合併の理由を説明してまわった。

一方、森岡先生は、説明会場で町理事者の説明の後、合併はまだ早い、と言って、佐礼谷中学校が無くなった場合の損失や不利益を理路整然と言って反対したのである。結局、合併は取り止めとなり、町は老朽校舎を壊し、新築の校舎が昭和五十四年に完成した。

森岡先生は退職の翌昭和三十年から地域の人達に推されて町会議員となり、通算四期務める。この間文教委員長や議長を歴任、各学校の整備・社会教育また地域のインフラ整備に尽力された。

先生は退職された翌年から新聞配達を始め、八十四歳まで続けられた。当時、新聞の休刊日は一月二日だけ。冬、雪の降る日は自転車が使えないので歩いて配達、しかも二十五年間一人で毎日続けられた、まさに超人的である。

昭和三十三年、森岡先生が町議一期目のとき、先生が発起人となり五万円を先ず寄付し、総額二十八万円の予算で佐礼谷地区の戦没者遺影集を作成、遺族九十七戸に贈呈されている。

また先生は、ご自分の山林・田畑・原野の一部を町に提供され、地域のための橋の建設、公園作り、そして秦皇山の地下水を上水道に引く事業をされた。このように物心両面にわたる奉仕、これら浄財の額は数百万円になるのではないかと思われる。

先生は、米寿のお祝いに町の敬老会に招かれ、町からの記念品を頂いたとき、はじめて自分が高齢の老人になっている事に気がついた、と語っておられた。毎日の生活がいかに充実していたかの証しでもある。

九十七歳まで老人クラブの連合会長をされ、定年退職後の四十年という長い期間、真のボランティア精神を発揮された。

森岡先生のご葬儀のとき、教えず子と思われる方が「先生の授業は厳しかった。後ろの方の席で私語でもしていたら、すぐチョークが飛んできた。」と話されていた。

先生は、平成十六年十一月三十日、百九歳と八日、当時、県下一の長寿で人生の幕を閉じられた。合掌

## 林傳次先生遺稿集

### 「把翠」を繙く(二)

#### 御退官のころ

先生が愛媛県師範学校校長を十年勤められて、退官なさったのは大正十二年三月末である。しかし発令になるまで誰も知らなかったし、それらしい気はとも感じられなかつたのである。たしか四月一日(三月三十一日かもしれない)であつたと思う。夕方帰宅して新聞を開くと(その頃大阪朝日は午後でない)配達されなかつた。先生退官の辞令が目についたので驚きあわてて、北歩行町のお宅へ伺った。「新聞を見てびっくりしたのですが、本当ですか。」「うん本当さ、まあ上り給え。」座につくと先生には珍しくしんみりした口調で、「言いたくてたまらなかつたけれど、いふべきことではないから、我慢したよ。妻(先生は常に奥様を妻と呼ばれた。)にだけは勿論話した。ただ母がどういわれるかが心配だったが、折を見て話すと、それはおめでたいなアといったので、肩の荷が一度におりたような気になつたよ。」とおっしゃつたが、「言いたくてたまらなかつたけれど……」のところ、私は大鉄槌を脳天にく

らつたようなショックを受けて、思わずうなだれてしまったのである。

それは、それから五六年前の次のような出来事をとつさに思い起したからである。

大正七、八年の頃は、第一次世界大戦に伴う好景気で、至るところに学級の増加、学校の新設などが行われ、教員大払底の時期であつた。まず辺鄙にいる人々に誘いの手の伸びるのは当然のこと、したがって愛媛師範にも他に転出する人が頻々とあつたものである。そうした頃のある日、教員食堂で山路先生が、「土百姓の子は困る。言うべき事と言うべからざる事との区別がつかぬ。」と少し激しい語調でいわれた。近く転任することに内定している教員があつたが、それがすでに生徒の間に知れ渡っている。それに対する先生の憤懣の気持が、この言葉となつたのである。まだ若僧で血の気の多かつた私などは、「土百姓という言葉だけはお取消なさ

い。」などと喰ってかかったり、教員室に帰ってから後も「何だ、家老の家か足軽の家かわからないが、土百姓などという放言は許せない」などと、ぶつぶつ言ったりしたのである。

○ そういう記憶のある私にとって、「言いたくてたまらなかったけれども、言うべきことでないから我慢したよ。」という先生のお言葉は、まさに一大痛棒であった。

おそくまでお酒をいただいたりしんみりしたお話を伺ったりして、夜更の道を東雲下から杉谷町の暗い通りを城北の寓居に帰りつくまで、いや床についてからもこの事のみを思い続けたものである。

「言うべきことと、言うべからざることを峻厳に区別すること。」これは公人としての肝要な心掛けの一つである。それを骨身に沁みて感得させて下さったのは、先生の右のお言葉であった。この事のおかげで、当然犯すべかりし過ちの数々から、まぬがれ得たことが今までにたくさんあったことと思う。新しく教壇に立つとする若い人々に対するはなむけの言葉にも、公私の別を厳密に区別して決して混淆しない為の注意の一つとして、「言うべきこと

と、言うべからざることを常に区別するように」という一項を必ず付け加えるようになったのも、この痛棒が、骨身に徹したからである。

○ 学生を講堂に集めての最期の訓辞では、

「後任の校長になってから、前の校長の時は……などとは絶対的口に出さないようにして欲しい。山路には山路の主義があり、浅賀(後任の校長)には浅賀の考えがあるのだから……」といわれ、また、教職員に対する御挨拶では「今まで通り御懇意にお願いしたい。しかし私の前で学校の話は出さないようにしていただきたい。話をきけば、私もつい批判がましいことを言いたくなる。耳にしないのが一番だ、私は小い、うとにはなりたくないから……」とおっしゃった。

どちらも当然すぎるほど当然のことであるが、その当然すぎることを、ずばりと口に出されるところが、山路先生の山路先生たるところだと言うことができよう。

この二つの言葉は、その時もいたく心に響いたのであったが、四十二年の公生活を去った現在の私には、当然すぎるほどのこの言葉のきびしさが、それこそ骨髄に徹して感じられるのである。



# 今、教育に思うこと

## 開かれた大学に 感動と感謝



小野植元幸  
(昭二九卒)

平成十六年十一月十三日愛大学園祭にて、法文学部記念講演会「行列のできる法律所」のゲスト丸山和也弁護士だった話以来の訪問。

中学三年の孫が、ミュージアムの資料を持ち帰り事前に知った折地方紙に見学し「感動した。」と投稿があったので見学するきっかけとなった。堀之内にあった博物館が移転して淋しい思いをしていた時、旧共通教育管理棟を改築。

子供達の大人気の恐竜「アロサウルス」三メートル余りの巨大な骨格。草原を駆ける声を再現し、迫力があり見学した子供は喚声をあげたことだろう。約一億五千万年前の恐竜化石にさわることもでき、石と同じ重さに驚嘆した。

愛大が造った世界最高硬度の人工ダイヤ、最先端をいくタンパク

質の研究等。知的好奇心を高める内容ばかりで、子供・大人ともに学習の場となったことだろう。

展示にも、見学者の目前での工夫が随所に見られ、雰囲気が県立美術館に、まさるともおとらぬと感じた。愛大ミュージアムならぬ貴重な研究や資料ばかりで、教授を核に、学生や地域の人々との連携した成果が随所に見られた。

緑の中庭やカフェもあり、くつろぎの場もあり、駐車場、見学料は無料。見学しやすい条件整備ができており、高齢者でもたやすく訪問しやすく再度訪問したいと思った。

何よりも高齢者にとって、受付の対応や、土、日曜日には、学生のボランティアでガイドするのだと話されたこともすばらしいと思った。

ミュージアム開館一周年事業として、地方新聞八月二十六日付け「近代の書、先駆けの美」松山、愛媛大で三輪田米山展の見出しで掲載されていた。

故浅海蘇山教授の「米山研究」

の様子三浦和尚教育学部副学部長は「近代の書の先駆けとなった爆発的なエネルギーと造形美」を感じてほしいとコメントしている。

同窓会報一〇号にて、元同大教授菊川國夫氏の「愛媛大学と三輪田米山」の見出しで掲載されており、一読して鑑賞されるとよい。蘇山先生の研究は、松山を中心に諸家に伝来する掛け軸や屏風等に神社の注連石や墓碑等の石文、日尾神社に残した三百冊に及ぶ「米山の解説、記録、整理」によって米山の全貌を明らかにした功績は大きい。

迫力ある書を称揚する人が多く全国の各地で展覧会も開かれた。書の専門誌「墨」で「二十世紀の書家五十人」の一人にも選ばれている。菊川先生は「県及び国の重要文化財」として登録すべきであると提唱されている。

県下の小中高校生、各大学の学生及び一般の方々も鑑賞し、日本文化の継承にもなるのではないかと。

三月末まで展示されるので、足を運び鑑賞したいと思う。



791-3351

喜多郡内子町五百木

一五四

明治・大正の頃の教育事情(二)



上甲 修 (昭二九卒)

小学校の規模

明治の二十年ごろまでは、小さな集落が村であり、従って、小学校は一般に小規模校から出発した。それも教員不足や財政事情の關係もあって、複式授業や複々式授業は、ごく当たり前であった。

中村熊治郎先生(西予市宇和町出身、大正八年度末退職・校長職)は、十七年間の教員経験の中で、ほとんど複式学級を持つておられた。退職される最期の年は、三年四年五年六年の四つの学年を一つの教室で教える複々式学級を担任した経験者でもあった。

なお市町村の合併が進むにつれて中規模、大規模の学校が増えてきた。

☆ 複々式学級 現在は廃止  
市町村合併の推移

明治の大合併 明治二十一年から二十三年にかけて全国で七万一千ほどあった市町村(多くが村)が一万五千ほどになった。昭和の大合併 昭和二十八年か

ら三十六年にかけて約一万あった市町村が三千四百ほどになった。

平成の大合併 平成十一年より三千二百ほどの市町村を三分の一位にするのが政府の目安という。平成二十二年三月末で全国市町村数は、一七二七である。

愛媛では明治十八年に一七四町と九九九村あったのが明治の大合併で一市二町二八四村になった。

明治時代に小学校を卒業された方の回想記

伊予市中山町佐礼谷小学校の百周年記念誌「母校百年史」からお二人の思い出を紹介します。

私の小学校時代

とほしもり簡易小学校

明治二十三年卒業 船田 団藏

私は、右の小学校を三年で卒業しました。所在地は、村中の岡崎商店の倉庫の裏でした。

入学は任意で、就学年齢も今よりずっと遅く、生徒も初めは少数でしたが次第に多くなりました。

教科は習字、作文、読書の三科目。先生は、城戸三夫先生お一人でした。

校舎は、いたって狭く粗末なもので、窓には四角の「たる木」を

打ちつけて出入りを防ぎ、内側に障子を入れて明かりをとる程度、玄関は板戸で内側に履物を置くようになっています。

冬期は雪降りが多く、素足に近い状態で登校するのですから、手足のこごえを教室の片隅にある大きな「いろり」(火を燃やす所)で手足を温めてから授業に移ったものでした。嬉しかったことは、

弁当に水餅を焼いてもらった時のおいしかったこと、今なお夢にまで見られるくらい忘れられません。

私は、小学校を卒業してから村役場に勤めました。税金の令書を書いたり、書面の控えをしたりの仕事で勉強をしました。本筋の勉強をしていないのが今に残念です。

その後、小学校は校舎移転の問題でいろいろありました結果、今の坪之内に移ったのです。

私の子供時代は、今の子供たちには想像のつかないくらい貧しいものでしたが、懐かしい思い出として今も強く残っています。

明治三十八年度卒業 泉ツ子ヨ  
私も八十五歳を過ぎ、四、五年前より記憶に乏しくなり、詳しい投稿のできない事を前もってお詫

びします。

びします。

佐礼谷村には本校と分校があり、本校は村中にあり、分校は平岡地区にありました。私は平岡の分校に通学いたしました。一年の時は平岡地区の影浦さん方の、うしろの山手の一室の小さな校舎でした。二年からは沖田さん宅の、うしろの校舎に移って行きました。

先生が泊まっていた部屋は、教室の隣の小さな部屋でした。

机は二人共同で並んで座り、机は二列で、中央を先生がやつと通れるほどでした。一年生の時は、男子の先生でしたが名前は知りませんでした。二年生からは四年の卒業まで大谷リョウという女の先生で、年齢は五〇歳くらいであったかと記憶しております。

学校のこと  
分校の生徒数は四年間を通じて大体十四、五人でした。授業科目は、修身、読み方、算術、習字、作文、ソロバン、書き取りなどでした。毎日一時間目には、必ず修身を教わったと思っています。

筆記具は、今のようなノートは無くして石板と紙石板を使い、書いては消し、消しては書きで、長く

使うことが出来ました。習字は草紙でしたので幾度も幾度も書くので、白いところが無くなるまで使用したものです。お清書だけは白い半紙を使用しました。

試験の時は、先生に連れられて本校へ行き、本校の生徒と一緒に行いました。内容は口頭試問と筆記試験でした。義務制であったのか、無かったのかは知りませんが、学校へ行かなかった人もあったようです。

年齢も一定してなく、年を取った人もいましたし、落第して五年間、学校へ行った人もありました。

祝・叙勲

(平成二十一年十一月三日)

☆瑞宝小綬章

教育功勞 菊池 裕子 殿

松山市永木町二一四九  
昭三十八年卒

☆瑞宝双光章

教育功勞 森原 弘則 殿

松山市北井門三三八一三  
昭四十年卒

# 第十二回愛媛大学教育学部 同窓会懇親会

## 報 告

同窓会理事

石丸 淳

期日 平成二十二年八月二十一日

(土)

場所 エスポワール文教会館

出席 百三十九名

### 一 伝統の重みある同窓会式典

事務局や各係・関係の方々の方力により、「会員相互の親睦向上を図るとともに、母校を支援し、もって教育振興に寄与することを目的とする」、二年に一度の愛媛大学教育学部同窓会懇親会が盛大に開催されました。

#### 式典次第は

- (一) 進行 (垂水葉子氏)
- (二) 開会のことば (峯本高義氏)
- (三) 黙祷 (友近温壽氏)
- (四) 同窓会長挨拶 (奥定一孝氏)



奥定会長挨拶



会場風景

#### (四) 祝辞

愛媛大学学長 (柳澤康信先生)  
教育学部長 (壽卓三先生)  
来賓紹介 (村上朋子氏)

#### (五) 記念口演

(真打 古今亭菊志ん)

#### (六) 開宴乾杯

(満田泰三氏)

#### (七) 閉会のことば

(村上朋子氏)

宮内正義先生、石川廣美先生、菊川國男先生、村上嘉一先生にご参加いただきました。

参加者は、本部役員や支部長会の方々熱心な働きかけもあって、愛媛師範学校の時代から現在までの方々に総勢百三十九名にのぼりました。ただ、前回もそうでしたが、昭和五十年代以降平成にかけての同窓生の参加が少なく

なっていることを記しておきたいと思えます。

### 二 同窓の心の生きる懇親会

まずは、前回に続いての真打ち古今亭菊志んさんの登場です。諸外国の笑話にも通じる人情と桃色の香りをもったお話が始まり、一瞬にして、座が温まりなごやかになります。

そして、一テーブル約十名で同期を中心に配置された懇親会の始まりです。時間の流れが一変しま



懇親会風景

す。同窓会とは不思議な時間です。飲み対話している間に相手の顔が変わり、目に表情に昔の学生の姿が現れて来るのです。当時の失敗もサボりも苦悩も時間の浄化により喜びになります。

詩吟も登場し、宴が深まりますとテーブル席からの移動です。

三津浜に教場のあった時期の話があり、現在の地に建物できた頃の話が交わされます。初任地の



菊志ん師匠の落語口演

話や県外の初任地や生活の話もあり、恩師の先生方との歓談もあります。

自分の学んだ当時の愛媛大学の様子と比べながら対話する中で、時間の壁は消失していきます。愛媛大学教育学部という同根でしっかりとつながります。

岡山から参加された方が岡山支部創設の話をしており、何百人という会員が存在するといった事実には驚きの声が上がります。空間の壁の消失です。

高揚した対話、歓談の中で生きるエネルギーが湧いてくるのを感じるのです。お酒のエネルギーも入っていますが、それだけではなことを確かに感じずにはおれないのです。対話の中に混じる諸先輩方の破天荒といつていい武勇伝？を伺えばそう覚えずにはおれないのです。

明日を生きる命を、この大きい組織としての愛媛大学教育学部同窓会からいつのまにかいただいで

います。

今、卒業生は教育の場をこえてはるかに大きく、芸能、文学、音楽美術、経済、社会と広がっています。この同窓会が人間の成長という視点で結ぶ同窓会となり懇親会となるだろうと歓談しながら感じずにはおれないのです。

教育の話はもちろん、学生時代の話はもちろん話の中心です。しかし、もともと今以上に、日本と世界の経済・文化・社会の話が語られる懇親会になる日が訪れるだろうと感ずるのです。

過去を温めそこから未来に生きるエネルギーを喜びの中で発見する懇親会の時間はあつという間に閉会の万歳三唱となります。

会員の皆様が若々しい面影のまま名残を惜しみながら会場を後にされています。次回平成二十四年の会で再会できますよう祈念し報告とします。



万歳三唱で閉会



柳澤学長より祝辞を戴く



壽学部長より祝辞を戴く



奥定会長挨拶  
同窓会発展への夢を熱く語る



満田理事の乾杯の音頭



峯本副会長の開会の  
ことばで会は始まった



物故同窓生への黙禱を  
呼びかける友近副会長



名司会の垂水副会長



お久しぶり！ 元気が！ 和気藹々の楽しい談笑と酒宴の懇親会

女性会員が大勢参加して下さいました



奥定会長各テーブルを巡り  
忙しく歓談をする



旧交を温め、そこで  
ニコリパチリ



若い女性軍に囲まれ  
满面笑みの壽学部長



飛び入り余興歓迎  
見事な詩吟に会場喝采



菊志ん落語の笑いの世界で会場は陶醉した



見事にまとめられた  
村上副会長の閉会の挨拶



万歳三唱で懇親会は盛会裡に終了



同窓会役員による 錦の間入り口受付風景

# 同期会

## 昭和三十三年 卒業生同期会



村上 嘉一  
(昭三三卒)

平成二十二年十月六日、松山市道後姫塚の「にぎたつ会館」において、昭和三十三年三月卒業生の同期会が開かれた。今回の参加者は三十四名であった。

資料によれば昭和三十三年の四年課程中等科・初等科卒業生の総数は百五十三名であった。卒業後、早くも半世紀を超える月日が流れた。まさに、光陰矢の如しである。

振り返れば、この会は同期生の長岡芳朗さんの発起・世話で初回を松山で開くことができたものである。会を開くための諸々をゼロから準備し、開催まで導いた長岡さんの尽力に私たち一同感謝したい。

その後、年一度のペースで開会、懐かしい旧友と再会し、昔日と未来を大いに語り合える得難い場と



なっている。その開催場所は県内(南予・中予・東予)から県外へも移し、早くも十一回となった。

今回は永井保雄さんが六名の幹事代表で諸々の準備をして下さった。当日は「柳吉彦さんと泉妙子さんが受付を担当し、集金・印刷物や名札の配布などを行った。座



受付をする一柳吉彦さんと泉妙子さん

席は柏井正子さんが丹誠込めて作った参加者各人用の美しい折り紙付きの抽選紙で決めた。

四時に大野正作さんの世話で写真撮影用のひな壇に参加者が立ち、並び、プロカメラマンが集合写真をお撮りした。デジタル写真技術のおかげで、すぐに処理され、宴会のお開きの時には、もう、美し

いカラーの写真をお願いした。写真撮影が終わった宴会場に移った。開会までの時間を使って、各々の近況報告を行うこととなった。皆さんの多様な近況報告が続くうちに、話がしだいに長くなってきた。半数の「報告」が終わったと



昭和33年卒業生同期会 平成22年10月6日

ここで五時近くとなった。宴会始めの時刻である。「近況報告」の続きは会の途中で行うこととなった。

宴会開会に先立って、物故者へ全員で黙祷を捧げ冥福をお祈りした。今は亡き学友の若かりし頃のあのこと・このことを懐かしく想い出した。

いよいよ五時近くとなり開会。今回の会の世話人を代表して永井さんが開会の挨拶を行った。「学んだ大学がある松山の地の同期会に、大勢参加いただき感謝します。情熱に燃えた学生時代を思い出し、大いに語り旧交を温めてい

ただきたい。松山は今、NHKスベシャルドラマ「坂の上の雲」で熱くなっています。松山城をはじめ、道後温泉も美しくなっています。また、明日は松山祭り、同期会とともに松山観光をして、若き

日を思い出して、楽しんで帰っていただきたい」との挨拶があった。乾杯の音頭は、現在も広島県の高等学校で数学を教えているという元氣一杯の満福弘之さんの発声

に全員で声高々と唱和した。宴たけなわとなり、「近況報告」の続きに加えて、あちこちのテーブルで、酒杯を傾けながら友との談笑・歓談が続いた。私たちも七十歳代半となったが、来年も

続いてこの会に元気で参加したい。次回はどこで開かれるのか。今治の宇高貢さんから「来年の同期会は今治で行いたい」との提案があった。どうぞお願いしますの拍手。

の泉妙子さんのリードで「伊子の高嶺の尾根にそひ……」(井手淳二郎作詞、下総統一作曲、昭和三十一年)で始まる愛媛大学学歌と懐かしい文部省唱歌「ふるさと」を元氣一杯に合唱した。

いよいよ、お開きとなった。岡山県から参加した河合健さん発声で同期生の健康と多幸、この会の益々の発展を祈念し万歳三唱、感激の中に参加者それぞれ再会を誓いつつお開きとなった。

「欠席者からのメッセージ」が四十七通届いた。「現在も教壇に立って教えている……」、「年齢相応に元気でやっております……」、「名簿を見て五〇歳若返りました……」などなどのメッセージに加えて、十八人の友から何らかの体調不良であるとの報告も

あった。皆さんのご健康の回復を心からお祈りし、再会できる日を期待したい。同期会が終わって数日たった。そこに参加者の一人から心温まるハガキが届いた。「……松山でのひとこまひとこまを思い出して懐かしく思っています。この喜びを胸にたたんで一年後の再会を楽しみにがんばっていきたく思います……」そうです！同期生の皆さん！今治での第十二回同期会で

元氣に再会しましょう。

第25回愛師22年同期会



篠田 和男 (昭二愛師本)

平成二十二年十月二十二日、午後十二時、松山市一番町伊予鉄会館クリスタルホールで同期会が開催された。

参加者三十名、遠くは東京から駆けつけてくれた谷口敬君や、広島からは豊嶋睦君、そして東・中・南予在住の諸兄たち総勢二十九名による会が、盛大に行われた。

会は、世話役の光田比公君の司会で開会。同期会会長上原勲君から歓迎のあいさつや同会の動向、現状報告があり、続いて豊嶋君の乾杯の音頭で懇親会に移った。



あゝ、紅の血は燃ゆる

なお、懇親会に先立ち、愛師校歌の斉唱、続いて慣例になっていた「あゝ紅の血は燃ゆる」を大合唱した。歌いながら、当時、名古屋での学徒勤労動員活動途中で、軍事召集を受けた諸兄を見送るとき、駅前で歌ったことや、夜々、B29の大空襲を受け、命からがら逃げた苦い体験を思い出していた。



会では、盃が重なるにつれ、話に花が咲き、近況交換にいとまがなく、親睦を深めた。



座って話すのが良いなあ

「人」・結びの心



重見 法樹 (昭二五卒)

私はここ数年、十月になると二五師会の案内を今か今かと待つようになって来ました。それは、われわれ世代は戦前戦後を通して二回もの心の傷を国家権力に焼きつけられてしまったからです。特に二回めの傷は教師の職業権を破壊する上に、子どもの成長権に影響をもたらす教育の危機であったの

です。しかれどもこのまま一蹲(うすま)ってしまふのでなく我。我は今、ここに子ども人間学とも言ってもよい(ひとりぼっちのきみが好き)(トトロの森のシンデレラ)から示唆された実践方法である「二者関係」から「三者関係」に高めていくと共に「ケアと応答を深めていく心くばりが、重要なありようになつてくる姿を学ぶに至って、このありようを「人むすびの文化」と、称し、われわれ二五師会の基調にするべく存在意義を高めてきたのです。例えば、今回の金子兄(ラガーマン)の……「お前が来てくれんと困まるけん」の電話の一声から先の「三者関係」が始動していくのです。電話の向こうでの三者関係の心の始動が手にとるように受けとられるのです。金子兄の車で内子の中野氏の宅に入ると、仏壇に拙著が置かれてあり、合掌しますと、「おい重見！お前の本は一寸難しいけど、内子の先生方が飲ばれているぞ！」と語りかけてくれたような感じがして、ついぞ涙してしまいました。中野兄と金子兄との出会いがなかったら、内子まで小生のささやかな実践論文の心(子ども達が教えてくれた「二者関係」から「三者関係」を高めていく「人むすびの文化」)を伝



える事はできなかったでしょう。最後にここまで二五師会を育てあげて下さった関係者に心から御礼を申し上げるつもりで、父(昭和16)番町小学校として勤務した学校と私の卒業した東雲小学校に拙著「登校拒否児たちが語る学校への「歴史的悲願像」、不登校児は、戦後史の語部であった(読売教育賞)……」を寄贈させて頂きました。本年の出会いを楽しみにしています。

# 走って走って三十年

―昭王会関東の集いから―

伊藤 始  
(昭二〇卒)

「品川区立中小企業センター」のケヤキの緑が、目にしみるような昨年六月、恒例の昭王会が開かれました。二十八回目になります。

冒頭二宮君の「走って 走って三十年」のスピーチがありました。彼は幼少のころ、腺病質でよく風邪をひき、学校をたびたび欠席しました。長じて尊敬する医師に出会い、「走る」ことを勧められます。そこで、二人の友人とジョギングとウォーキングを開始します。

早朝五時から三kmないし五km時には十kmを走破します。さらに三段切替えの自転車、サイクリングを楽しみます。雨天の日は、室内で駆け足踏み歩みを九十分、必ず行い、汗を流します。

走る途中に出会う人とのあいさつや、ちよつとした会話を交わすのも、楽しみだったようです。このようにして身体を鍛え、マ

ラソン大会にチャレンジします。愛媛県内では松山、今治など合計四十三回の参加です。県外では、北は千歳・釧路湿原から、南は湯布院、別府まで十一回に及んでいます。

さらに海外のフルマソン(規定どおり四二・一九五km)に挑みます。グアム、ホノルル、メルボルン、ニューヨークなどです。全部完走しているのだから、驚きです。脱帽です。

記録された走行距離の累計は、マラソン四九〇〇〇km、ウォーキング七四〇〇km、サイクリング七三〇〇kmです。

計画的に、「走る」生活を継続することで、高血圧は正常になり(薬は服用)、風邪ひきは皆無など、健康体になりました。また、たくさんの人との出会いと交流が楽しかったといえます。現在は大会参加は遠慮し、室内での駆け足歩みが続いています。

親からももらった体を、より健康体にしていこうとする、二宮君の努力と情熱に、強い感銘を受けたひとときでした。

さて今回は、首藤君の、「各駅停車の車窓から見た自然と人生」

です。どんなユニークな話が聞けるか、楽しみです。

永井君の会員消息、菊池君の松山支部の報告の後、懇親会に移りました。味わい深い人生経験が次々に語られ、時のたつのを忘れるくらいでした。

出席者は、愛媛から池川啓司、菊池巧、二宮一。関東は兼頭吉市、神野正光、首藤敏、永井恒男、伊藤始の八名です。



## 原稿募集

―次号 第二二二号―

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

◇ 「今、教育学部に思うこと」を特集しています。ふるってご投稿下さい。

★ 同期会や支部同窓会などの集いや活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・絵手紙・川柳・俳絵・短歌・詩等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと

2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など

3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばせて載りますので、ご了承ください。

◇ 原稿〆切 四月三十日

★ 発行 七月一日 予定

★ 字数 依頼者以外は千二百字厳守

四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。

★ 写真 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

## 会報の送料納付

について

平成二十二年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

### 記

①一ケ年五〇〇円で、二ケ年分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩いので、何ケ年かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新します。

送金方法 郵便為替・現金書留・振替口座番号

振替口座番号 〇一六四〇一七二七五四  
送り先 〇七九〇一八五七七  
松山市文京町三  
愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

# 学部トピックス

## 愛南町立家串小学校

### 「ふれあいコンサート」に出演

愛媛大学教育学部の学生六人で構成されるトーンチャイム・アンサンブルグループ《ブルガリア》は、十月三十日、愛南町の家串小学校で行われた「ふれあいコンサート」に出演した。

このコンサートは人権教育の一環として行われ、児童や教職員の他にも、保護者や地域の方が聴きに來られていた。トーンチャイムの美しい音色、児童たちの素直で透き通るような歌声が体育館に響きわたり、音楽の力によって人と人がつながる感動をたくさんの人と共有できた素晴らしい時間となった。

《ブルガリア》は、『ホール・ニュー・ワールド』や坂の上の雲メインテーマ『stand alone』など五曲をトーンチャイムで演奏した他、トランペットの演奏や、愛南町の人権ソング『今を生きよう』

で児童たちの歌とコラボレーションするなど、バリエーション豊かな演奏を披露し、好評を得た。

《ブルガリア》は、来年二月に行われる演奏会に向けてこれから更なる練習を積み重ねていくとのこと。聴いてくださった方々の笑顔が彼らのエネルギーの源となっている。



コンサートの様子



コンサート出演メンバー



メンバー4人（岡田さん、松山さん、福岡さん、前田さん）

## 上海万博「共同の万博・共同の歓楽」に教育学部生2人が参加

愛果さん、車椅子ダンスー前田由起枝さん（松山市在住）、岡田知子さん（伊予市在住）の四人です。

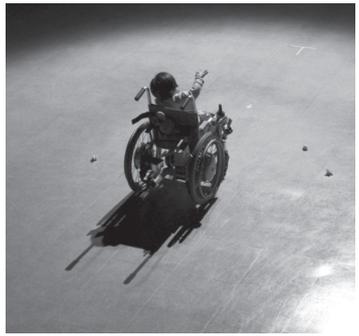
きっかけは、去年の四月、明治安田生命社会貢献事業に採択された「みんなのダンスパフォーマンス FUKUBUKURO（福袋）」（指導：教育学部教授牛山眞貴子先生）でした。この公演からエィブルアート・オンス

平成二十二年六月二十九日(火)、教育学部生二人と障がい者二人のダンスユニット「Lucky Bag from Matsuyama」が「共同の万博・共同の歓楽」に参加しました。

「共同の万博・共同の歓楽」は、上海万博で万博史上初となる障がい者館パビリオン「生命陽光館」が開設されたのを記念して開催されたイベントです。

イベントでは、中国や台湾のグループも歌やダンスを発表し、障がい者の芸術による豊かな国際交流が実現されました。

参加メンバーは、愛媛大学ダンスAZ所属の教育学部四回生福岡小百合さん、同学部三回生松山



作品のラストシーン

テージ東京公演に三作品が選出され、上演されました。その作品が上海万博関連事業に関わる委員の目に留まり、日本代表としてこの機会を得ることになりました。

発表作は、国内外で活躍中の舞踊家 高橋砂織さんのナビゲートで創作したダンス作品「Melody of blossom and sky」で、日本の「おはよう」「こんにちは」の挨拶や「鬼は外」など古来の風習を表現として取り入れたものでした。

公演では、千人を超える上海の観客から、「おはよう」が木霊のように返ってきたり、「You are No.1」の声がかかるなど、とても良い反応を頂きました。

参加した二人にとって今回の経験は、障がいの有無に関わらず、アートは人々の心を結ぶことが実感でき、人間的にも成長できる良い機会になりました。

# アラスカ日記

## NPO法人和田重次郎顕彰会

### 土居貴美会長に聞く



和田重次郎顕彰会 監査

仁木 省三(昭二七卒)



土居会長は、「和田重次郎顕彰会」初代会長上岡治郎先生急逝の後、二代目の会長として活動をされています。

会長は、二〇一〇年三月五日から十三日にかけて、和田重次郎が愛してやまなかったアラスカを訪ねました。

私たち顕彰会は、その貴重な体験を伺い、少しでも、現在、アラスカ重次郎の足跡、自然の状況などを知り、今後の顕彰活動に生かしたいと思いインタビューいたしました。以下はその記録です。

**Q** 会長は、どんな思いでアラスカを訪ねましたか。

和田重次郎が生きた明治時代は、特に日本においては、平等に自由に生きることができにくい上に、海外へ行くことなどはほんの一部の人しか考えられない時代でしたのに、誰一人知人のいない未開の極寒の地で、どんな思いで若

い命を燃やし続けたのか、その一端にでも触れることができればと思いいアラスカを訪ねることにしました。



**Q** アラスカに降り立った第一印象をお聞かせください。

顕彰会会員五名でアラスカを訪ねました。まず、アンカレッジに降り立ちましたが、空気が大変澄んでいるのを感じました。風景

はもちろんスケールが大きく、広がる雪原、高い山々、白骨林を思わせる木が生えているのが見えるばかりでした。重次郎が足を踏み入れたアラスカは、もともとずっと開けていない極寒のアラスカだったはずですから、その不安と孤独感は、私たちの想像を絶するものだったはずですよ。

**Q** 最初に、アラスカの方々に大変歓迎を受けたと伺いましたが、その様子をお聞かせください。

アンカレッジに着くと、スワードなどの市長さんをはじめ、アラスカ大学の教授、前州副知事、日本領事官、また、それぞれの地域の名士などが集まっておられ、和田重次郎について、私たちが思っていた以上の関心を持っておられたのには大変驚きました。そして、和田重次郎を冠にしたイベントや松山と繋がったの街おこしなどの計画案を熱い思いで話され、アラスカに果たした責任のようなものを感じました。

そして、他国から来た和田重次郎が、今でもアラスカの人々の心に残っていて、その足跡が今、またクローズアップされようとしているのを感じ、驚きとともに顕彰する意義を再確認しました。夕方には、スワード市に移動し、市民の皆さんとの交流をしまし

た。スワード市は、北海道の市と姉妹都市の提携を結び、子供たちを沢山短期留学させており、保護者の中には、日本語の分かる方もいらっしやいましたので、何となく近親感がわきましたし、重次郎の足跡をしっかりと確認したり、その心を感じたりして帰らねばという思いも強くしました。



歓迎 レセプション

**Q** 重次郎のアラスカでの行動は、全て犬ぞりだったそうですが、犬ぞりレースなどをご覧になりましたか。

一日目の宿泊は、アンカレッジのヒルトンホテルでしたが、運よく翌日の朝ホテルの前で、犬ぞりレースの出発セレモニーがありました。午前三時頃から犬たちを乗せたトラックが集まって来る様子は、壮烈なものでした。しばらくすると、それぞれのト

ラックから犬たちが降ろされ、食事をしたり、休憩を取ったりしているようでした。その犬たちの中に和田重次郎の名前からとって「ジュウジロウ」と名づけた犬がいるというのでその犬とマッシュャー(犬ぞり使い)に会いました。マッシュャーは、犬ぞりレースを始めた和田重次郎のことを良く知っているようでした。犬はこちらを向いて、ポーズをとってくれたように見えました。落ち着いていて物静かな感じの犬でした。



ジュウジロウ犬

セレモニーが始まり、間隔をあけて一チームずつスタートするのですが、夜のうちに凍って針のようになっている氷で足を怪我しないように、犬たちはみなフエルトの靴を履いて走ります。スタートが近づくと、どのチームも走りたくて、待たせておくのが大変なようでした。犬の種類は、ハスキー犬だそうです。

スタートを切ると、チームはマッシュャーと犬たちが一体となっ

て規律よく走り去って行きます。感動の一時でした。こうして、二十頭以上で編成されたチームは、命がけで昼夜を問わず何日も走り続けるのです。過酷なレースで、怪我をする犬もいて、ゴールする頃には、走ることもできる犬は、ずいぶん減ってしまっていると感じました。マッシュヤーと犬たちの言い知れない強い信頼関係を痛感しました。

私たちは、この機会に犬ぞり体験をすることにしたのです。最初、舟津さん（私たちが十日間お世話になったマッシュヤーであり冒險家の方）の指導でスノーモービルにそりを引かせて、簡単にそりの使い方を指導していただきましたが、それでも難しかったのに、犬に引かれるとどうなることかと不安になりました。

走り始めは犬のスピードに付いていけなくて、体に力が入り、もう大変でしたが、犬たちもきつと走りにくかったことでしょう。ブレーキをかけると、犬が私の顔を見て「どうした？」という表情をするようになり（少なくとも私はそう思ったのですが）私が「ちょっと待って。休もう」と日本語で言うのと犬たち（三頭）は、雪を食べたりして休憩するのです。「さあ、行こう」とブレーキをはずすと、リーダー犬に従って走り始めます。何度かそれを繰り返してい

る内に、私はだんだん犬が可愛くなってきました。度々この犬たちと行動をしていたら犬好きの私などは、可愛くてたまらなくなるのだろうと思いました。

和田重次郎の犬たちは、ハスキー犬より大きいエスキモー犬だったようですが、重次郎は、私が思っていたほど孤独ではなかったのかもしれないと感じたのです。彼には、信頼し共に生きている犬たちがいたのですから。彼らは、アイコンタクトのとれる仲間だったのかもしれない。



犬ぞり レース スタート

**Q** 次に、特に印象に残ったアラスカの景色などお聞かせください。

まず、想像をしていたとおり、白一色の景色、凍りつかない風に舞う雪、真白な高い山々、車で走ってもなかなか人家に出合わない広大な自然などは、私たちが初めて

身をおく新鮮な空間でした。

驚いたことの一つは、星座の大きく美しいことでした。中でも、北斗七星や、冬にいつも見えているオリオン座の何と大きく美しくかつたことか。雪の上にそのままねころがって空を見たい思いに駆られました。

また、夕日に照らされピンクに染まったマッキンリーの荘厳で堂々とした美しい姿は、人々の心を捉えてやまない魅力があります。

もちろん、オーロラはその不思議さと、美しさが世界の人々の心を捉えてやまないことを体感しました。

こうして、十日間の日々を振り返ってみると、このアラスカには厳しい自然だけではなく、人々の心を捉えてやまない沢山の魅力があることに気づくと共に、和田重次郎が日本に帰ることなくアラスカ



で一生を終えた理由の一つを見つけた気がしました。

また、夏には一面が沢山の種類の高山植物の花々で覆われ実に素晴らしい眺めだそうです。

先日は、写真家松本紀生さんが、アラスカライブで秋を見せてくれました。重次郎の笑顔が見えた思いでした。

**Q** 最後に、会長はフェアバンクスの舟津圭三さん宅に宿泊されていますが、舟津さんとの関わりや思い出をお聞かせください。

舟津圭三さんご夫妻には、私たちのアラスカ十日間の重次郎顕彰の旅のご案内やお世話をいただき、楽しく充実した日々を過ごさせていただきました。

舟津圭三さんは、大阪出身の、探検家であり元マッシュヤーでもあり、現在はアラスカ州フェアバンク스에居を構えておられます。マッシュヤーとしてのご経験が長く、未開の地アラスカで犬たちと共に生きた重次郎の偉大さを感じておられ、私たち重次郎顕彰会と、アラスカの重次郎顕彰会、アラスカのフェアバンクス市やスワード市などとの橋渡し役をしていただくなど、今後の顕彰活動にとって、無くてはならない方です

私たちは、三月十日、十一日、舟津さんの研修棟「ワンワンロッ

ジ」に宿泊させていただきました。

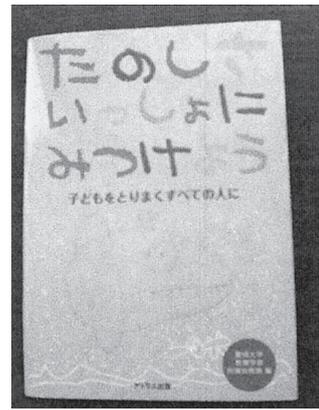
その間、憧れのオーロラに出会わせていただき、表現を絶する感動を経験しました。また、犬ぞり体験や雪山トレッキング（？）体験等、重次郎が生きたこの地で、重次郎が体感したアラスカの魅力の、本当に小さな小さなかけらを感じさせていただきました。その上、見たことのない大きな蟹をご準備いただいたのパーティー、一緒に歌ったナツメロ、どれもみな私たちの心の宝物になりました。そして、このすばらしい出会いに感謝するとともに、この関わりが、ますます深くなることを切に願って帰国の途に着きました。



ワンワンロッジ

サウナ

寄贈図書



「たのしいしよにみつ  
けよう」

寄贈者 愛媛大学教育学部  
・編集 附属幼稚園

A5サイズ 一八一頁

発行者 アトラス出版

※貸し出し可

愛媛大学教育学部附属幼稚園に行くと、子どもたちが笑顔で元気いっぱい遊んでいる。自分なりに様々に工夫した工作物を持って遊んでいる子どももいれば、ダイナミックに砂遊びをしている子どもも、集団でボール遊びをしている子どもも、「〇〇屋さんごっこ」をしている子どももいる。もちろん、けんかをしている場面に出くわすこともあるが、教師がうまく中継ぎをしながら、互いに折り合いをつけている。

さて、ここに平成二十一年に発刊された『たのしいしよにみつけよう』という本がある。

附属幼稚園の先生方、愛媛大学の先生、附属幼稚園に係る方々が、協力して執筆している。こうやって現場サイドから連携した本だからこそ内容にも説得力がある。

附属幼稚園での、幼児のエピソードには、ほっとしたり心が温かくなったり、幼児の心の育ちが見えたりする。直接的な体験を重ねながら幼児は育っているのだとつくづく思う。例えば、教師、子育て中の人、幼児教育を担当している人が読めば、幼稚園の様子がわかり疑問が解決したり、子どもや幼児教育を大切にしようという気持ちが一層わいたりするであろう。また、保育の評価についても考えるヒントになるであろう。そして、大学の先生方や幼稚園関係の方々が執筆されている文章を読むと、今まで見逃してきたことをもう一度考えさせられる。

これからも愛媛大学教育学部附属幼稚園は、愛媛県の幼児教育をリードし続けていくであろう。異学校種の接続・教育の連携を考えるなら、ぜひ、小学校の先生方も読んでいただきたい一冊である。



「この子らと自由の空へ」  
——「腎炎・ネフローゼ」を守る会の記録——

寄贈者 脇坂千鶴子  
・著者  
電話・FAX 〇四四一九五四—  
三三二七  
四十六判 二二二頁

大阪ボランティア協会との関わりはいつ頃からですか？  
一九七四年に現・岡本榮一理事長（当時・事務局長）を訪ねて「腎炎・ネフローゼ」を守る会（以下、守る会）の百万人署名や援助のためのボランティアに関する相談をしたのがきっかけです。

——このたびの著書もそこから？  
本の出版に関しても二十年前くらい前に「今までの活動を本にまとめては」と岡本理事長が言われて、ずっと覚えていました。「守る会」で国や府に働きかけて得た成果は多いのですが、それが今の若い世代にとっては「行政の福祉の一環」と当たり前に受け止められていきます。それに至った経緯には様々な人達の絶え間ない努力があったという事を知っておいてほしいと思いました。

「守る会」が行政を動かした成果とは？

大きくいうと、①それまで保護者の大きな負担となっていた治療費の「公費負担」。それから、②子どもだけでなく保護者の将来への安心のための「病院内学級の開設」と、③病気の早期発見早期治療につながる「学校検尿」の実施の三点です。これらの実現が当時の患者や家族の切実な願いでした。特に「病院内学級」は病気を良くすることにもつながるのです！

——学習することで回復が早まるのですか？

この病気が絶対安静なのですが、ただ無気力にベッドに横たわっているのは、親子とも精神衛生上良いわけがありません。「病院内学級」で義務教育を受ける

事で社会への道もつながるし、将来への目標も希望も湧き出るのです。そして、どういう訳かここで学んだ子どもたちは医療関係に携わる優秀な子どもが多いのです。安静第一の病気の性格上読書量が膨大というのも関係があるかもしれませんね。

——本に込められた想いは？

この本は単に運動の軌跡を追う回想録ではありません。一人でも運動を立ち上げ始める勇氣を持って、行政をも動かす大きな力になり得るという事を知ってほしいのです。これからも増え続けるであろう難病に苦しむ人達とその家族、さらには組織を立ち上げようとする人達への応援の本でありたいと思っています。

——特に気を配られた事はありますか？

岡本理事長からのアドバイスもあって、お世話になった皆さんの名前を極力書き入れました。そうした方を通して一人でも多くの方の目にふれることを願っています。



会報送料・寄付者名

平成22年7月〜12月

仁木省三	仙波正子	浅田豊	井上清夫	山内敏明	高瀬健治	武田泰治	森下幸令	永田徳雄	善家允陽	水野美世子	秋山瓊愛	鮎川仁輝	北藤幹夫	斎藤明子	花房淳子	川端明子	豊嶋陸	森緊吾	佐伯カズミ	宮崎英子	上窪美鶴	山岡ヨシ	片山卓	清水千恵子	首藤敏
秦節子	町田厚	田坂光明	石丸法義	稲葉郁夫	岩本眞男	福井志津江	山内ムツ美	小池祐輔	大本いつき	河野朝饒	畔地朝男	近藤基繁	河野ミサト	住田鈴	山田由香理	中野元太郎	牧野富美重	伊藤清茂	杉野和恵	黒田源喜代	綿村直哉	景山馨	池上キヌ子	藤田みさと	奥村みさと
井川清子	伊藤幸子	関井順悟	友澤正夫	西田雅子	広橋昱子	清水逸子	石丸澄子	西本ニワ子	津田匡美	寺尾敏幸	山中忠雄	岩市照雄	堀本昌子	渡辺淳美	日高富佐子	袋瀬キミヨ	羽賀宏	日野一郎(内)	上甲久美子	豊田良子	豊田茂夫	鴻上安博	山根和久	伊藤良子	

敬弔

(物故会員)

22・8・10	22・8・5	22・7・31	22・7・26	22・7・23	22・7・19	22・7・18	22・7・17	22・7・12	22・7・10	22・6・24	22・6・22	22・6・15	22・6・11	22・6・5	(死亡年月日)	(氏名)
河野時寛	善家廣	加地正和	堀本静江	山下恭喜	前谷和美	渡部和子	松田昇	印南伯史	岸田武治	石丸義	難波江鈴恵	森下勝馬	森実緑	堀田馨	堀田馨	堀田馨
22・10・23	22・10・19	22・10・10	22・10・1	22・9・23	22・9・15	22・9・10	22・9・9	22・9・2	22・7・29	22・8・9	22・8・25	22・8・13	22・8・11	22・8・11	22・8・10	22・8・10
和泉頼重	井川梁	桑原農夫	関家佐鶴子	関家通伸	近藤愛	武智啓	真部歌子	上岡哲男	松樹ヨシエ	真木キシエ	北岡敏郎	大澤憲治	武田倭文子	坂本義一	松友正和	竹内照子
22・12・10	22・12・8	22・12・6	22・12・4	22・11・27	22・11・22	22・11・27	22・11・16	22・11・13	22・11・9	22・11・31	22・10・31	22・10・31	22・10・29	22・10・27	22・10・25	22・10・25
菊池淳	園部純	山田哲	大野博臣	神野久夫	石井喜栄	加藤操	橋村久子	近藤恭	平井義雄	高橋政雄	菊池光隆	續木猛	川崎清規	越智政夫	越智政夫	越智政夫



愛媛大学南加記念ホールで

# 愛媛大学文化講演会が

## 開催されました



愛媛大学は、地域に立脚し地域に輝く大学を目指して教育・研究を続けており、この度は、地域に

開いて、愛媛大学卒業生お二人により、昨年十一月二十三日（勤労感謝の日）、愛媛大学文化講演会が、愛媛大学南加記念ホールで一般会員、学生を含め、県内外から約二三〇人が参加し開催されました。

講師は、教育学部同窓生で、昭和三十九年卒伊井春樹氏、昭和四十年卒村上護氏のお二人、両氏とも教育学部中等国語科を卒業されました。伊井氏は、現逸翁美術館長（大阪大学名誉教授、前



国文学研究資料館長）をされており、文学博士でもある氏は源氏物語研究の第一人者です。

村上氏は、作家、文芸評論家、山頭火研究の第一人者で、一九九三年以来、毎日一句を評する俳句コラムは、現在も愛媛新聞をはじめ地方紙十四紙で掲載中です。

当日、伊井氏は「与謝野晶子の源氏物語礼賛歌」と題して講演をされました。



氏は館長されている逸翁美術館は、阪急電鉄創業者の小林一三のコレクションを展示しており、明治から大正、昭和に

かけて活躍した、歌人・野晶子から小林一三氏に送られた手紙や短冊などの収



蔵品を紹介しながら、人間・与謝野晶子の人物像を、レジユメ「与謝野晶子略年譜」、「君死にたまふ

ことなかれ 旅順港包囲軍の中に在る弟を歎きて」、「昌子をめぐる人」、「晶子からの各種書状」等を、PCを巧みに操作し、私達に実に分かりやすいプレゼンテーションされ、源氏物語と与謝野晶子の人間的な関わりが鮮明になり浮き彫りにされた感があり、一時間半があつという間に過ぎていきました。



村上氏は、愛媛新聞第一面に、俳句コラム「季（とき）のうた」を十八年間も連載されています。

当日、村上氏は「現代俳句について―季のうた（連載十八年）―」と題して講演をされま



した。氏は、種田山頭火研究の第一人者として知られています。一九九三年から十八年も続いている、愛媛新聞に連載中の「季のうた」の執筆を通して、俳句は世界でも最先端の文学となる可能性があるあることを、具体的事例を繕きながら話をされていました。



しかし、近年の俳句には技巧に走る傾向が多々みられると、静かな語りの中に情熱をこめて警鐘を鳴らす姿に心うたれるものがありました。「人の心を打つ俳句である



心が豊かになるアカデミックな楽しい講演会でした。



実は私達の身の言葉大切にしたい」と、私達の心に快く響く一時間半でありました。

ることは「人生」。『あなたという人間は何か』ということを問い続けることにある。」と情熱をこめて語られました。また、「気の利いた俳句ではなく、自分自身の言葉を大切にしたい」と、私達の心に快く響く一時間半でありました。

